

(西暦) 2015 年度

修士学位申請論文

指導教員	末田 清子 教授
------	----------

論文 題目	和 文	日本における若年ゲイのつながり -現実社会とツイッターに着目して-
	欧 文	A qualitative study on the relationship construction through twitter among Japanese young gay men

研究科	国際政治経済学
専攻	国際コミュニケーション
コース	国際コミュニケーション

氏名	大谷 勇介
----	-------

目次

1. はじめに.....	5
1.1. 本研究の目的.....	5
1.2. 本研究の構成.....	6
2. 先行研究.....	7
2.1. セクシュアル・マイノリティ.....	7
2.2.1. セクシュアル・マイノリティの分類.....	7
2.1.2. 性の構造.....	7
2.1.3. 日本におけるセクシュアル・マイノリティの現状.....	9
2.2. 日本におけるゲイ.....	9
2.2.1. 日本におけるゲイの歴史.....	9
2.2.2. 日本のゲイとエイズ.....	10
2.2.3. 日本における異性愛者と同性愛者.....	11
2.3. ゲイ・コミュニティ.....	12
2.3.1. ゲイのつながり.....	12
2.3.2. ゲイ・コミュニティにおけるインターネット.....	14
2.3.3. 若年ゲイのインターネット利用目的.....	14
2.3.4. ゲイのインターネット利用の特徴.....	17

2.3.5.ゲイのインターネット利用状況.....	18
2.4. CMC におけるアイデンティティ.....	19
2.4.1. ネット・コミュニティの利用動機.....	19
2.4.2. 社会的アイデンティティと CMC.....	19
2.4.3. CMC と自己呈示・自己開示.....	20
2.5. 本章のまとめ.....	20
2.6. 研究設問.....	22
3. 研究方法.....	23
3.1. 調査方法.....	24
3.2. 調査協力者.....	26
4.半構造化面接の結果.....	28
4.0. はじめに.....	28
4.1. 若年ゲイのツイッター利用.....	28
4.1.1. ゲイ・アカウント利用状況.....	28
4.1.2. ゲイ・アカウントの意味.....	31
4.1.3.ゲイ・アカウントの特徴.....	36
4.1.4. フォローとフォロワーの関係.....	44
4.1.5. ブロックとフォロー解除.....	50

4.1.6. リツイートとファボ.....	56
4.2. ゲイ・コミュニティの特徴.....	60
4.3. ゲイ・アイデンティティ.....	62
5. 分析.....	64
5.1. 若年ゲイのつながり.....	66
5.2. 若年ゲイ・コミュニティにおける体裁.....	71
5.3. 若年ゲイ・コミュニティの拡大.....	73
6. 結論.....	77
6.1. 研究設問への考察結果.....	77
6.2. 本研究の専門領域への貢献.....	81
6.3. 本研究の限界と課題.....	81
謝辞.....	83
引用文献.....	84
参考文献.....	86
付録 1： 面接調査同意書.....	87

1. はじめに

1.1. 本研究の目的

本研究の目的は、日本における若年ゲイ¹の現実社会とインターネットでのコミュニケーションがどのように相互作用しているかを明らかにすることである。昨今、LGBTQ 特にゲイの人々のメディア露出がよく見られる。元ゲイ雑誌 *Badi* の編集部にいたマツコ・デラックスが司会を務めるテレビ番組もいくつか放映されていたり、いわゆるオカマ＝トランス・ヴェスタイト（異性装者）だけでなく乙男²やゲイの露出も数多く認めることができる。

さらに、2015 年 4 月には東京都渋谷区で結婚関係に相当する「同性パートナーシップ証明書」の発行を定めた条例が施行された(朝日新聞 DIGITAL2015 年 4 月 5 日付)。賛否両論はあるものの、LGBTQ についての議論が行われること自体が彼ら/彼女らの社会進出や異性愛者主体の一般社会から理解される第一歩と言えるであろう。

また、セクシュアル・マイノリティにとって同性愛に関するプラスな世間の動きだけではなく、同年 7 月には、いわゆる売り専³店長が未成年者を雇用していて逮捕された事件や、同年 8 月に国会議員である武藤貴也氏が 19 歳少年を買春していた不祥事の露見、同年 11 月には、未成年者を猥褻な媒体に出演させたとしてメーカー社長逮捕、東京都の学校教師が生徒に対する淫行に及んだとして逮捕されるなど、同性愛者にとって異性愛者主体の一般社会の世間から一方的に不道德なイメージを植え付けられるという事件も少なからず起こっている。

こういった異性愛者主体の一般社会から徐々に注目されつつあるゲイがどのようなコミュニケーションを図り、コミュニティを形成しているかについて探求した日本の研究は極めて少ない。海外においても、日本においても、ゲイの出会いやコミュニケーション・ツールがオンラインへと移行していることは数少ない研究論文において言及されているが、その詳細について述べられているものはない。よって、本研究では若年ゲイを対象に、彼らがツイッター (Twitter) に投稿しているツイート・画像等を参考にすることと、加えて半構造化面接で得られたデータを KJ 法(川喜田, 1967)により分析し、以下の研究設問を明らかにしていくことを目的するために筆者は以下の二つを本研究で探求する設問として置く。

¹ 本研究では全体に亘って、ゲイ＝同性愛者とバイ＝両性愛者を、ゲイという括りで記述する。また、全体的なゲイを指し示す場合、「ゲイ」、若年のゲイを示す場合、「若年ゲイ」と置く。

² 女性的な顔立ちの男性。乙女のような男性。

³ 室内での売買春の営業(伏見,2004,p.274)

1. 日本の若年ゲイは何を求めてツイッターでのコミュニケーションを行っているのか。
2. 日本の若年ゲイは、現実社会とインターネットにどのように関わり、コミュニティを構築しているのか。

1.2. 本研究の構成

上記二点の研究設問を明らかにすべく、本研究は以下のように構成される。

次の 2 章では、先行研究をもとに、セクシュアル・マイノリティと、日本におけるゲイの存在を概観し、またゲイ・コミュニティの形成についても同様にみていく。続いて 3 章では、調査方法と調査協力者について記載し、4 章において半構造化面接によって得られた結果を項目ごとに示す。5 章では、4 章で立ち上がったテーマについて詳細に分析する。そして最後に 6 章で調査の結論をまとめる。

2. 先行研究

2.1. セクシュアル・マイノリティ

2.1.1. セクシュアル・マイノリティの分類

セクシュアル・マイノリティという言葉は、日本語で「性的少数者」と翻訳され、セクマイとも省略して使用されるが、異性愛者ではない人々のことを総称するものである（池田,2006）。セクシュアル・マイノリティの中には LGBT のほかに、GID（性同一性障害）やインターセックス（半陰陽）、アセクシュアルなど様々な人々が含まれる⁴。

石丸(2001)では、セクシュアル・マイノリティについて同性愛および両性愛を性的指向のマイノリティ、トランスジェンダーおよび GID を性自認のマイノリティ、インターセックスを身体的性別違和から起こるマイノリティであるとの分類を試みている。また、LGBTQ といった表記も目にすることがある。Q というのは Queer の頭文字を取ったものである。

河口(2009)によると、Queer というのは英語圏に端を発する言葉であり、元来「変態」「おかま」という侮蔑的な意味を持っていたものの、LGBT に含まれないセクシュアリティを包括する言葉として Queer が使用されるようになったと述べられている。

2.1.2. 性の構造

このように性の捉え方は多様であり、その構造を逐一細分化するのは難しいものの、池田ら(2003)で述べられているものを引用して LGBT の概略について理解を深める。池田(2003)では、石丸(2004)で述べられている、性的指向、性自認、生物学的性に加え、社会的性別（ジェンダー）という基準が含まれているため、性構造の分類化をより詳しく理解できると考えられる。四つの分類を以下のようにまとめる。

① 社会的性別（ジェンダー）

ある人を取り巻く社会や文化が考える男らしさ/女らしさといった男性像/女性像とがジェンダーである。社会や文化が想定する各個人の外見や言葉遣い、社会的役割によって決定づけられる男女の差異。

② 性自認（ジェンダー・アイデンティティ）

⁴ GID=Gender Identity Disorder：生まれ持った身体と性別に違和感を覚える人
インターセックス：生まれ持った身体の性が男女両方の特徴を持つ、または男女どちらかに分化していない人

アセクシュアル：性的欲求を持たない人
セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク, 2006, pp.13-16

ある人が自分の性をどのように捉えているかを性自認と呼ぶ。例えば、ある男性が自身を男性である、と認識すれば、その男性の性自認は男性ということになる。しかしながら、身体的に男性であったとしても、自身の性自認が女性であるといった差異を持つ人々も存在する。

③ 生物学的性（セックス）

生物学的に、男性/女性という外見や身体的特徴を基準としたものが身体的性別である。具体的には、性染色体、性腺、内性器、外性器が身体的特徴にあげられる。

④ 性的指向（セクシュアルオリエンテーション）

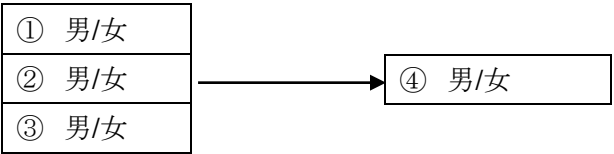
性的指向とは、ある人が性的欲望や恋愛感情を抱く対象の性別が同性か異性かという基準である。池田(2003)では、「指向」という漢字を当てているのは、好き嫌いを表す「嗜好」や意志を持って望むという「志向」ではなく、たんに方向性という意味が込められている「指向」を使用するのが約束事とされていると述べられている。

さらに、上記の四つの基準を用いて **LGBT** を分類すると図 1 のようになる。

(①＝社会的性別、②＝性自認、③＝生物学的性、④性的指向)

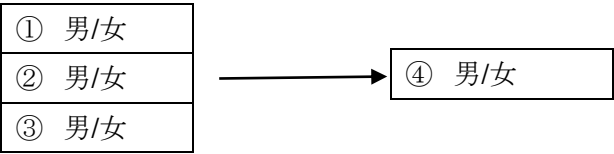
同性愛者（L＝レズビアン、G＝ゲイ）

Homosexual の訳語であり、性的指向が同性である人のこと。



両性愛者（B）

性的指向が異性と同性のどちらにも向く人。また、性的指向に性別が関係ない人。



トランスジェンダー（T）

生まれ持った身体の性別に違和感を持つ人。

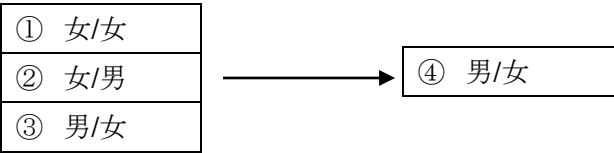


図 1：セクシュアリティ分類⁵

⁵池田ら(2003). p.72 の図 1 を参考に筆者が修正加筆

図1ではLGBTについてのみを扱ったが、LGBTのシンボルであるレインボーフラッグ(宮澤ら,2008, p.218)のようにセクシュアリティは多様であり、分類するのは難しいとされている。

2.1.3. 日本におけるセクシュアル・マイノリティの現状

身体的特徴から成る生物学的性や服装などの外見および言葉遣いによる社会的性別は、一瞥して異性愛者と同性愛者の判別がつく場合が想定されるものの、各個人の判断や内に秘めるものである性自認や性的指向は可視ではないため、自己申告という形でなければセクシュアル・マイノリティの存在は明らかにならない。次に示す日本でのセクシュアル・マイノリティの人口統計についても各個人の性自認が適切かどうか、また社会からの差別を恐れ公言しないセクシュアル・マイノリティの人々も数多く存在するなどの理由から正確な数値を列挙することはできないと思われる。電通ダイバーシティ・ラボ(2015)は、2015年4月に、性自認、生物学的性、性的指向を基準とし、LGBTを含むセクシュアル・マイノリティについて全国69,989名に対してアンケート調査を実施している。その結果、アンケート協力者の7.6%がセクシュアル・マイノリティに該当し、2012年に同機関で行われた調査によって示された5.6%を上回るものとなった。その要因としては様々な要因が考えられるが、本項において詳細に説明するのは割愛する。ただ、この数値の上昇からも読み取れるように、これから先さらにLGBTに対し関心が高まるのは言うまでもない。

2.2. 日本におけるゲイ

本項では、日本におけるゲイの存在を概観するために、同性愛者の歴史的変遷、エイズ、異性愛者との関係という三つの項目を設け論じる。

2.2.1. 日本におけるゲイの歴史

鷲尾(1921)では、日本において男性が男性と精神的または肉体的なかかわりを持つという行為についての記録は平安時代にまで遡るとされる。特に、寺家の僧は女犯を禁じられていたため、稚児を性愛の対象としていたようである。その後、鎌倉時代に武家社会が成立し、主従関係を結びそれを強化するために主人が小姓を愛でるという習慣も成立していったと述べられている。その後、花咲(2008)によると戦乱の時代が終わり江戸時代ごろから「男色」という文化が成立し、現在の売り専とはほぼ形態を同じにした男娼専門の陰間茶屋⁶も出現し始めた。ただし、これら日本独自の習慣や文化の中に「同性愛」といった概念はなく、同性を希求する衝動や性自認などの枠組みが存在せず未分化で曖昧な状態であったと伏見

⁶ 歌舞伎の若衆などが客に性的サービスを施した茶屋。

(2004)では述べられている。

2.2.2. 日本のゲイとエイズ

エイズ(AIDS)は、Acquired Immuno-Deficiency Syndrome の頭文字を取ったもので、後天性免疫不全症候群と訳される。性行為などによって HIV ウイルスに感染し、発症した病気の状態のことを指す。厚生労働省は 2015 年 5 月 27 日付で、2014 年度の日本国内におけるエイズ動向を発表し、20 代では過去最多の 349 人の HIV ウイルス感染を報告した⁷。日本は先進国の中でもいまだ HIV ウイルス感染者が増加し続けていることが問題になっているが、特筆すべきは、男性同士間で性行為を行った人のエイズの感染率である。日本における男性 HIV 感染者の主要な感染経路は同性間の性的接触である。本研究においては、エイズの感染原因や治療法などについては主題に深く関連するわけではないため割愛し、日本において、同性愛者というカテゴリーを浮き彫りにした主要因ともいえる HIV/AIDS に関連するものからゲイ・コミュニティについて先行研究をレビューする。

新ヶ江(2013)では、日本において「ゲイ」という存在が一般社会に認知されるようになったのは HIV/AIDS の出現からであったと述べられている。1980 年代に日本でエイズについての議論が行われ始めたころ、エイズという病に関連付けられたイメージはアメリカのゲイであったそうである。アメリカではエイズの表象として男性同性愛者が登場し、批判の対象となっていた。それに対し、日本では“同性愛者”という括りすら不可視であり認識され得なかったために、同性愛者はエイズ研究の言説の外に追いやられていたと述べられている。この不可視で外へ追いやられた同性愛者という存在を、エイズという社会問題を利用して異性愛主体の社会へ表出しようとしたのがアカー⁸などである。彼らの運動は 1988 年に成立したエイズ予防法への反対運動など、一般社会へ可視化されたものであり、同性愛者という存在を主体化させていったと述べられている。

また、2.1.1.で挙げたゲイという分類は、社会的性別、性自認、身体的性、性的指向の基準からなされたものであるが、新ヶ江(2013)に、MSM という分類が表記されている。MSM というのは Men who have Sex with Men の頭文字を取ったものであり、直訳すれば、男性と性行為をする男性となり、行動を基準にして分類された存在である。この概念は、公衆衛生や疫学の分野で使用される専門用語であり、ここでの Men は生物学的及び解剖学的男性を指示していると述べられている。つまり、ある人が身体的な性別と精神的な性別の違和を覚えたり、同性に対して恋愛感情を抱いたりすることとは関係なしに、単純に同性と性行為をするか否かで分類が行われている。MSM という概念により、エイズという病を研究する上では、感染リスクの可能性を孕む行動という基準のみによって対象を明確化する

⁷ 厚生労働省エイズ動向委員会、2015 年 5 月 27 日

⁸ 正式名称「動くゲイレズビアンのかい」の NPO 法人。セクシュアル・マイノリティの社会進出を目指す活動をしている。

ことができた。新ヶ江(2013)で、MSM という語が全世界に浸透したきっかけとして 1994 年に日本で開催された国際エイズ会議などが挙げられている。

上記のように、日本また世界的にみてもゲイとエイズの関係について研究されているものは数多く存在する。しかしながら、あくまでセクシュアリティとしてのゲイではなく、性行為の介在による感染経路、感染率についての研究が主である。

2.2.3. 日本における異性愛者と同性愛者

マイノリティという言葉は少数派、少数民族を意味し、マジョリティの対義語である⁹。セクシュアル・マイノリティに含まれるホモ・セクシュアル＝同性愛者とそれと対照をなすヘテロ・セクシュアル＝異性愛者との関係性については心理学および社会学では少なからず研究がなされてきた(例：福田ら,2008; 桐原,2013; 和田,1996)。そこで本項では、日本における同性愛者と異性愛者の関係についての先行研究を挙げる。ただし、本研究で扱うのはゲイについてであるため、男性同性愛者に関連する部分だけに焦点を当てる。

和田(1996)は、東京都内の大学生を対象に、参加者の性別と性役割同一性という観点から同性愛への態度について述べている。調査協力者からのアンケート調査によって、男性性の高い男性は同性愛者への社会的容認度が低く心理的距離感が大きいことを示している。つまり、同性愛者は社会から期待される男性としての役割を果たしていない存在として認識されているがゆえに異性愛者から「欠陥がある」とみなされるようだ。また、桐原(2013)においても、女性に比べて男性の方がジェンダー観を強く持ち、「男らしさ」というジェンダー観から逸脱している同性愛者へのイメージは否定的であると述べられている。

また、上記の和田(1996)や桐原(2013)の研究では異性愛者から見た同性愛者という観点から研究がなされていたものの、福田ら(2008)では同性愛者目線から異性愛社会の捉え方について述べられている。ここではある男性同性愛者へのインタビューによって、彼らが異性愛者の社会と同性愛者の社会の境界を区別しつつ、行き来していることを明らかにしている。具体的には、インタビュー調査協力者が、同性愛者の社会を「こっちの世界」、異性愛者の社会を「あっちの世界」と呼称することによって区別している。またインタビュー調査協力者である男性同性愛者がゲイとして生きる社会をポジティブに捉え、対照的に異性愛者として生きる社会をネガティブに捉えていることを述べられており、「こっち」と「あっち」という指示代名詞が表わす距離感からもそう解釈できる。ゲイが自らの生きるゲイ・コミュニティを指し示す「こっち」という呼称については森山(2010)でも取り上げられている。そこには、「こっち」という言葉が含有する呼称によるゲイ同士の仲間意識の強化が述べられている。さらに、「ゲイ」、「ホモ」、「オカマ」などの特定のイメージを植え付ける語よりも、あいまいな形で「こっち」という語は分類による差異を補てんしていると述べている。この結果は、アメリカでの Queer という呼称の利便性と類似していると思われる。

⁹ 広辞苑第五版、岩波書店

本項では日本の男性同性愛者と異性愛者との関係を挙げたが、次項では男性同性愛者同士の関係について見ていくことにする。

2.3. ゲイ・コミュニティ

筆者が用いるゲイ・コミュニティという言葉は、伏見(2004)にあるような、あくまでゲイ視線から考え出されたものであり、1990年代のHIV/AIDS研究の場における焦点化された集団を指すのではないことを冒頭に断っておく。ゲイ・コミュニティという概念を最も早く出現させたのは、伏見(2004)である。彼は、2000年に行われた「東京レズビアン&ゲイ・パレード 2000」というセクシュアル・マイノリティによるセクシュアル・マイノリティのためのイベント開催に大きく参与した。一連の流れにおいて、彼は一つの可視化された「コミュニティ」というゲイの居場所・つながりをこのイベントの中に見出し、「ゲイ・コミュニティの誕生」と述べた。さて、このゲイ・コミュニティとはいったいどのようなものであるかを、次項から説明を試みる。

2.3.1. ゲイのつながり

ゲイにとっての居場所、またはつながりというのは大きく分けて二種類に位置づけられる。森山(2012)は、「特権的な他者とのつながり」(pp.20-21)と「総体的なつながり」(p.41)という表現を使ってゲイ独自のつながりについて述べている。前者は、「親密な」「性的な」「愛情による」関係性についてのつながりであり、後者はゲイ全体の社会集団としてのつながりであると述べられている。その中で、発展場は特権的な他者とのつながり、ゲイバーは総体的なつながりとされていることから、本項では、二つのつながりに分類されている発展場とゲイバーでのゲイの関係性についてまとめる。

①特権的な他者とのつながり：上記で述べたように、特権的な他者とのつながりとは「親密な」「性的な」「愛情による」関係性についてのつながりと定義され、例として「発展場」と呼ばれるものが存在し、無料（屋外）・有料（屋内）といった区別がある。具体的には、発展場とはそこに集まるゲイが他の相手を見つけて「性行為へ発展」させる場所であり、無料の場所というのはいわゆる公共スペースであり屋外であることが多い。そこには、公園や駅のトイレ、銭湯などが含まれており、全国的にゲイの中で有名な公園などは無数に点在している。有料（屋内）のものについては、あるビル全体または1フロアが性行為をするための場所になっており施錠できる個室を設けている店舗やカーテンによって仕切りがなされるものもあり、客は料金を支払って入場するという形をとっている。この両者の違いは、前者が二者間でのみのつながりではなく第三者の介在も含めた総体的なつながりの可能性を含んでいるのに対し、後者の場合二者が個室で行為に

及ぶことが多いことから、特権的な他者とのつながりに成り得ることが多いことであると、森山(2009) は述べている。さらに、2000 年には東京都江東区の新木場公園で「ホモ狩り」という事件も起き、屋外での発展行為に身の危険が生じその屋外での行為が疑問視され、それに伴って発展場の存在を可能にしていた総体的なつながりも減少し、後者のような個室で性行為に及ぶスタイルが増え特権的な他者とのつながりへと移行していったと述べられている。

このような発展場は通常、両者ともに「暗闇」と表現されるように相手の細かい部分を見たり、相手の素性について深く立ち入ろうとしないことが多い。年齢や性的指向、職業などを気にすることもせず、単純に性的欲求が満たされればそれで良いといった場所である。その場において求められるのは、相手のポジション（タチ＝男性役、ウケ＝女性役）といった性的役割¹⁰と顔や体つきといった外見のみに焦点があてられる。発展場は性的欲求のはけ口ということを目的として設置されている以上、性行為を求める二者にとってお互いの素性を詳しく問うこともない（Humphreys,1970）。海外や日本のエイズの研究で、ゲイ特有の文化である発展場が問題視されるのは当然のことで、そこでは先述のように相手の素性も知らず、初対面の相手と性行為のみを目的とするわけであるから、相手がどんな性生活をしていたとしても、病気の可能性も意識しないままに性的接触を行うわけである(新ヶ江,2013)。

筆者は主に発展場についての説明を特権的な他者とのつながりとして位置づけたが、森山(2012)においての特権的な他者とのつながりとは、恋愛、パートナーシップ、セックスフレンドなど、複数人で行われるものでない、排他的な二者関係という意味合いである。基本的に不特定多数の他者と同時進行で行われることのない、特権的なつながりであるとしている。

②総体的なつながり：一方で、ゲイバーに代表される社会的な親交を求める場所では外見や性格、社会的属性が重視されることが多い。ゲイバーというのは世界的にも有名な新宿二丁目などに多く存在するゲイが店員として接客を行う酒場である¹¹。ゲイバーの出現は、伏見(2004)によれば第二次世界大戦後まで遡るとされ、初期のゲイバーは売り専のシステムも兼ね備えていたようである。全ての店がそういったシステムを採っていたわけではないが、店舗の中に性行為が可能な部屋を備えていた場合もあり、当時は社会的な差別から場所の確保もゲイバーにとって大きな役割であったと述べられている。つまり、初期のゲイバーの形態の多くは、来訪した客に酒類を提供する店員が男娼も兼ね備えていたわけであり、総体的なつながりと特権的なつながりの両面を含有していたと言える。しかしながら、森山(2009)は伏見(2004)の中で述べられているような初期型のゲイバーの多くは姿を消し、性的サービスを提供する店と飲食サービスをする店はほぼ完全

¹⁰ 主にこの性的役割は、性行為をするときの役割として捉えられる。

¹¹ 異性愛者の店員という場合も多くはないが存在する。

に分離していると述べられている。初期のゲイバーに対し、現在主流のゲイバーでは総体的なつながりを重要視していると思われる。

現在、新宿二丁目のみを見ても、約 300 軒の店舗が存在する¹²。主に、ゲイのみを客の対象としたバーと、女性や異性愛者も入ることのできる観光バーに大別され、後者は 2000 年代に入り増加している(森山,2009,p.45)。伏見(2004)に述べられている初期のゲイバーは、店主がゲイでありそれを噂などで知った他のゲイが客として集まっていたということからゲイの集まる社交場という認識が強く、社会から疎外されていたゲイが密会するために存在しているというところが大きいようだ。森山(2009)で述べられているように、ゲイバーが特権的な他者とのつながりよりも総体的なつながりを求めることを重視している現在では、発展場のような外見だけで相手を判断するということに加え、より多くの情報に関わる相手から得ようとするという推測される。相手の年齢や、職業も会話の中に当然含まれ、性的なパートナーを求めるというよりは交友関係といった精神的なつながりを作る方が多い。

上記のように、大きく分けて二つのつながりをゲイ・コミュニティの中に見出すことができるようである。このように特権的な他者とのつながりと総体的なつながりは目的に応じて使い分けられ存在していると述べられているものの、インターネットの登場によりその境界線は曖昧になっていると考えられるが、日本におけるゲイのインターネット利用の詳細について学術的研究では述べられていない。そこで、海外の学術論文を主としてゲイのインターネット利用について紹介する。

2.3.2. ゲイ・コミュニティにおけるインターネット

森山(2012)に語られている中に「インターネットは主流である」というほど、現代のゲイ・コミュニティにおいてインターネットは主流な交流場所であると言えるであろう。また Pingel ら(2013)は、YGM=Young Gay Men¹³の人々が性的接触、友人関係、情報収集を目的としてインターネットを利用していることを示している。さらに、鹿野 (2011) や新山 (2012) においても、ゲイの出会いはインターネットを介した出会いが主流であることやゲイ・ライフとゲイ・サイトの関係の必然性が示唆されている。加えて、竜(2009)には、新宿二丁目というゲイ・コミュニティと位置付けられる場所もインターネットの登場によって淘汰され、様変わりを遂げていることが述べられている。これらの研究によって、ゲイとして生き、ゲイの社会を構成するものの中にインターネットというツールは大きな影響を持っていると言えるだろう。まず、若年ゲイがこういった動機や目的をもってインターネットを利用しているかということについてみていく。

¹² <http://www.gclick.jp/> 2015 年 4 月現在

¹³ Pingel(2013)では 18・24 歳のゲイ男性をこう呼んでいる。

2.3.3. 若年ゲイのインターネットの利用目的

若年ゲイのインターネット利用について、彼らはそこに何を求めどういったつながりを欲しているのだろうか。2.3.1.に挙げたような、特権的な他者とのつながりと総体的なつながりといった形態を越えたものがインターネットには存在しているのかもしれない。Baams ら (2011)では、SSA (=Same Sex Attracted : 同性愛者) のインターネット利用目的について、老年層が特権的な他者とのつながりを重要視するのに対し、若年層は総体的なつながりを求めてインターネットを利用しているという結果を示している。また、Szulc ら (2013)において、若年層のインターネット利用は情報を得るという目的に絞られているとされ、老年層においては情報を得ることよりも、性的充足感を満たす手軽な手段としてインターネットを利用していると述べられている。

さらに、社会的なつながりという言葉に内包されるものとして、Pingel ら (2013)では、主に若年のゲイがアイデンティティ形成を行うためにインターネットを利用していることを論じている。つまり、社会的なつながりを求めるためには自分が「ゲイであること」をカミングアウトしなければ他のゲイとはつながりを構築することはできない。性的指向という不可視なものを共通項として出会うためにはカミングアウトは必須であるものの、社会の中で声を大にして性的指向を開示することができないためにインターネットを利用していることを明らかにしている。彼らは自分自身が何者であるかという情報を、インターネットを通じて得、同じような他者に知り合うことによって自分のアイデンティティを確立させるのである。この論文の主な着眼点はアイデンティティ形成であるが、そのほかにもゲイにとってのインターネットの利点についても論じられている。そこで、以下に、①匿名性、②年齢と距離、③オンラインとオフラインの関係、という三つの視点を挙げる。

①匿名性

ゲイのインターネット利用の利点として語られるもっとも大きな部分はネット特有の匿名性である。電子掲示板においては身長体重年齢や、性的ポジションのみを表記する場合がほとんどで、本名を語ることも必要とされない、むしろ偽名や、虚偽の情報を相手に示しても気づかれにくい。また、金城(2010)は出会い系電子掲示板を利用しているゲイが容姿や体型に多く言及していると述べていることから、彼ら自身個々の相手の名前について強く興味を抱かないとも考えられる。この匿名性がゲイに安心感を与えているという先行研究の結果は、明示的にゲイが社会から抑圧され差別されていることを示している。つまり、対面のコミュニケーションでは他者に自分がゲイであると言いきくために匿名性が高いネットに居場所を求めるわけである。

また、三浦(2009)では、匿名性は三つの階層的な構造を有すると述べられている。その三つとは、低水準のものから順に、視覚的匿名性、アイデンティティの乖離、識別性の

欠如である。以下にそれぞれの簡単な説明を記述する。

1. 視覚的匿名性

匿名性の中でも最も水準の低いものであり、単純に相手と対面することなく、相手の顔を見ることのない状態であることを指す。電子メールや電子掲示板、オンライン上のチャットに関して当てはめることのできる匿名性であるものの、昨今のCMC(Computer-Mediated Communication,いわゆるネット・コミュニティ上のコミュニケーション。(三浦,2008。以降、CMC と記す。))特にツイッターには当てはまりづらいと察する。

2. アイデンティティの乖離

1. 視覚的匿名性と比べてアイデンティティの乖離はより匿名性として高位のものであるとされている。オンライン上でのコミュニケーションにおいて、ハンドルネームといった本名とは別の作弄的な名前を持つことがこの段階であるとされている。

3. 識別性の欠如

これは、匿名性の最高位であり、オンラインにおける情報発信者を特定できない場合をこのように称する。一般的に、現実社会において用いられる匿名性（寄付やアンケートなどで用いられるもの）と同様の意味を持ち合わせている。

上記の三つの匿名性の階層構造とは別に、折田(2012)では、本人到達性とリンク可能性という概念を用いてオンラインの匿名性をまとめている。前者は、オンライン上の情報発信者が誰であるか特定できるかどうかということに基づき考えられ、後者は異なる複数の行為がある1人の人物によってされているかどうかということに基づき考えられている。リンク可能性における、複数ID間の所有人物の同定という考え方は、本研究が取り扱うツイッターもアカウント開設、アカウント所有数に制限がないため参考になると思われる。

しかしながら、上記のように、オンラインでの匿名性についてCMC研究の分野で研究が行われているが、あくまでその匿名性の範囲は限られている。つまり、それはオンライン上で関係性が完結している場合のみと考えられる。実際にネットの外へ出て、対面での出会いを望む場合、匿名という制度は崩れてしまうのである。

②年齢と距離

①の匿名性の項でも挙げたが飽くまで現実社会とオンラインが分離していて、実際に会うことを想定せずオンラインでやり取りしている場合にのみインターネットの匿名性が適用されるはずである。また、ゲイのインターネット利用バーチャルデートや、スカ

イブなどを使ったバーチャルな性行為についてなされている研究もあるが、その実対面で出会ってみたいという望みが社会的差別によって抑圧されているがために、バーチャルな世界へ逃げていると Taylor ら(2014)では述べられている。つまり、インターネット上で関わりを持つだけでなく、実際に対面で会ってみたいという願望を抱いた場合は、その二つを切り離して考えることは不可能である。しかしながら、実際に会うことを想定した出会い系サイトなどを性的接触やエイズに関する面から研究しているものは多からず見当たるものの、現実社会とインターネットが相互作用しているといったものは筆者が探した中では少ない。

本研究で扱うツイッターは、Jones(2005)に述べられているゲイがゲイと繋がるためにシンボルが使われていると述べられているものとは同様に当てはまるが、関係を持つ二者の年齢と居住地区間の距離がゲイにとってかかわりを持つうえで全く無関係とは言い難い¹⁴。したがって無意識的ではあるが、ゲイ同士が年齢や居住地区間の距離について、かかわりを持つか否かの判断材料としている可能性は大いにある。

③オンラインとオフラインの関係

本研究で取り上げるツイッターは相互の情報発信や、相互関係の上に成り立っているため、簡単に関係を断ち切ると現実社会での関係性に影響が出ることもある。ゲイにとってのツイッターという媒体は、CMC での匿名性の利点については意味をなさないことも多い。それは、インターネットの利用目的がインターネット上でのつながりで完結してしまうものとは違い、基本的に現実社会で出会うことを目的としているからである。Race(2015)でも言われているように現実のゲイ・コミュニティとネットのゲイ・コミュニティが同一化されている昨今では、インターネットからの退出は、現実からの退出と同意義であるといっても過言ではないのかもしれない。つまり、匿名性を利用して良い面でも悪い面でも自由な発言や態度が許されるインターネットと、相手との対面コミュニケーションを求められる現実社会では当然のごとく差異がある。さらに鹿野 (2015)では、新宿二丁目でゲイバーでの仕事に従事するゲイを対象に研究を行っており、ゲイのインターネット利用は実際に会うことを前提に行われていることを指摘している。こういった先行研究からも、一般社会において、たとえば学校という現実と、ツイッターという仮想現実を使い分けることができて、ゲイの場合はゲイ・コミュニティとツイッターはイコールで結ばれる場所であろう。また、インターネットの媒体には、SNS や電子掲示板、スマートフォンのアプリケーションソフトといったものが挙げられるが、2.3.1.でつながりの種類を発展場とゲイバーという二つを例に挙げ示したが、インターネットの登場によりその二つでは不足である。そこで次にインターネットでのコミュニケーションの特徴を見ていく。

¹⁴ Jones(2005)で行われたインタビューの中に 22,173cm,136lbs という表記が見られ日本では 170/50/24 身長/体重/年齢といった表記が使われる場合がある。

2.3.4. ゲイのインターネット利用の特徴

インターネットの登場により、ゲイが現実社会で行っていたコミュニケーションや発展場、ゲイバーなどの装置はサイバースペースに取って代っている(Race, 2015)。そこで、特権的な他者とのつながりと総体的なつながりという視点からサイバースペースを分類しそれについての先行研究を挙げる。

Race(2015)では主にインターネットを通じた出会いがエイズの感染率に影響を与えていることについて論じ、それを補強する論としてインターネットが発展場とゲイバーの線引きを無くし、統合したことによって性行為もさらに手軽にできるようになったと述べている。具体的には、投稿者が電子掲示板やアプリケーション上に自身の身体の写真を載せるという行為は、「投稿者が性的接触目的である」と閲覧者は意味づけし、特権的な他者とのつながりの発生が起こるのである。もちろん、サイト自体が性行為目的に特化したものもあるが、そうではないものが多い。よって、利用者が上記のように目的に応じて気軽に欲求を満たせることが現実社会との大きな違いであろう。発展場とゲイバーは別々に存在する場所であるが、インターネットは一つの場所の中に二つのつながりを内包しているのである。この先行研究において評価すべき点は、現実社会とインターネットの融合という見方である。

また、日本の研究者による論文を概観すると、金城(2010)で沖縄地域のゲイ専用出会い系電子掲示板を利用している男性の投稿文の分析が行われている。テキスト分析の対象になっている掲示板は沖縄県の中での更なる詳細な地域・居住地区を表した「中部掲示板」「南部掲示板」、容姿や体型を表した「太め掲示板」、年齢による分類である「30代掲示板」の四つである。その結果、四つのインターネット掲示板利用者の出会いの形態が性的接触を主なものとしていると述べられている。しかしながら、「30代という年齢に制限があること」や「日常の生活を投稿したりせず、投稿者が要件（性的接触）だけを掲載している電子掲示板という媒体」だからこそ、非常に部分的な結果を表出しているのかもしれないのであり、ゲイのつながりとして一般化することはできない。また、日本のゲイ研究の中で多く取り上げられ、対象となっているゲイは、主に東京の新宿二丁目や大阪の堂山といったゲイ・タウンに関係する調査協力者を募ったものや、ゲイ・タウンにおけるフィールドワークなど調査の上で地域の限定性を保有している。

2.3.5. ゲイのインターネット利用状況

日本のゲイにとって、インターネットは出会いツールとして大きな割合を占めている。2010年にエイズ予防財団によって行われた調査では24歳以下のゲイが利用しているイ

ンターネット・サイトについて述べられており、mixi が約 70%、次いでゲイ用出会い系アプリとツイッターがそれぞれ約 50%という割合を示している。2010 年のこの研究において mixi が高い割合を占めているものの、2014 年に ICT 総研によって行われた SNS 利用に関する調査では、mixi を利用している人口は調査全体の約 20%ということから、2015 年現在ゲイの mixi 利用率も必然的に下がっていると思われる。

鹿野 (2015) は、ゲイバーの戦略の一つとしてツイッターの利用を挙げている。昨今、若年層のゲイバー離れが叫ばれる中、ツイッターのリツイートという情報拡散システムに着目し宣伝の意味を込めて、ゲイバーがアカウントを作成しているということについて述べている。ゲイバーの集客方法が、従来のように年上や先輩ゲイに連れて行ってもらおうという縦のつながりによるものであった時代は終わり、友達が店子をしているから飲みに行くといったように横のつながりへと変化していると言えるだろう。

2.4. CMC におけるアイデンティティ

本研究が取り上げるツイッターは CMC の一種であり、CMC に関する先行研究は多岐にわたっている。そこで筆者は、本研究に係る CMC 諸研究について概観していく。

2.4.1. ネット・コミュニティの利用動機

三浦 (2008) では、ネット上でのコミュニケーションの動機について個人 Web コンテンツに焦点を当てて述べられており、個人 Web サイトを二つの目的について分けて論じられている。一つ目はサイト作成者による「自己表現」、二つ目はサイト作成者と閲覧者によって行われる「他者との交流」である。こうした、相互のコミュニケーションをネット上で可能にさせたのが個人 Web サイトであり、1990 年代半ばごろに盛んに作成・公開が行われ始めたようである。この利用動機は、本研究が取り上げるツイッターも発信者と閲覧者の相互のコミュニケーションであるため同等のことが言えると思われる。

また、三浦 (2008) はネット・コミュニティに関して現実と対比させる形でその動機を述べている。氏によると、人は現実社会において、しがらみや他者からの評価観念によって表出しにくい自分を持ち、煩わしさのない CMC で本来の自分を出しているという。さらに、McKenna, (1998)では本来の自分という概念の解釈を性癖やセクシュアリティの表出と関係づけている。ニュースグループのログの分析および参加者への質問紙調査を行ったこの研究では、同性愛者と SM 嗜好の二者について、現実社会でマイノリティではない人々と比べ、ネット・コミュニティへの参与が密であり、さらに外部（同性愛者でありつつも、差別などの観点で自身を偽り異性愛者として生きている社会）へのカミングアウトの促進にもつながっているという研究報告がなされている。つまり、現実社会におけるマイノリティ・グループはネット上のコミュニティにおいて関係を築く

ことが数多くあり、またその連帯性は強固なものであると述べられている。マイノリティ・グループは現実社会でカミングアウトしにくい立場であり、ネット・コミュニティという対面ではないという利点を持ったコミュニティに参加することは彼らにとって大いなるネット・コミュニティの利用動機なのである。

2.4.2. 社会的アイデンティティと CMC

三浦(2009)は、社会的アイデンティティと CMC におけるアイデンティティとの差異について述べている。CMC という対面で行われるコミュニケーションが少ない媒体において、社会的な手掛かりの表出は重要視されず、情報発信内容自体に重きが置かれることが多いとされる。しかしながら、年齢や性別など、コミュニケーションを取る上で基本的かつ重要な手掛かりは、対面のコミュニケーションのように様々な社会的手掛かりが交絡し合う場合より、CMC の方が顕著に表れるとしている。さらに、匿名電子掲示板などの個人を特定することが不可能な、識別性の欠如が存在する CMC では、個人間の差は埋没し、より可視化されている性別や民族などのより大きな社会カテゴリー集団としてのアイデンティティを促進させることも指摘されている。

2.4.3. CMC と自己呈示・自己開示

三浦(2009)によれば、自己呈示と自己開示の違いは次のように示されている、前者は意図的に自身が他者に見せたいような自己肯定的なイメージを調節して表出するものであり、一方で後者の場合、自身の情報に関する作為的な調整は行わず、ありのままの自身を表出するものとされている。また、CMC では自己呈示を容易に行うことができるとしている。その理由として、CMC では非言語コードの露出の乏しさが指摘されている。つまり、現実社会における対面のコミュニケーションにおいては、容姿、ジェスチャー、声色など様々な非言語コードが相手のイメージを判断する上で考慮されるが、CMC においては非言語コミュニケーションを行うことが少ない。そのため、CMC においてはテキストのみを意図的に調節すれば良いので自己呈示をしやすいとしている。

2.5. 本章のまとめ

本章では、まず初めにゲイ＝男性同性愛者がどのような人々のことを指すのか理解するために、ゲイを包括するセクシュアル・マイノリティについて概観した。

また、日本でのセクシュアル・マイノリティの現状として、2015 年に電通ダイバーシティ・ラボ(2015)によって行われた『LGBT 調査 2015』の結果を示した。この結果により、日本でのセクシュアル・マイノリティ人口統計は増加傾向を見せていることが分か

った。しかしながら、あくまでセクシュアリティは不可視なもののため、正確な人口把握は不可能であると思われるが、今までセクシュアリティを開示しにくい社会から開示しやすい社会へと変われば、将来的にも数値の増加も見込まれる。

次に、日本におけるゲイの歴史を概観し、男性が男性に対し精神的また肉体的につながりを持っていたことが明らかになった。日本において、同性愛やゲイという概念は元来存在しなかったものの、寺家の僧が稚児を寵愛することや、武家において主従関係を結ぶためのいわば同性愛システムは確立されていた。

日本で同性愛やゲイという概念が顕著に一般社会に表出し始めたのは1980年代に起こったエイズ・パニックがきっかけとなったことが新ヶ江(2013)から分かった。エイズ・パニックが発生した当初、アメリカではエイズに付随してその感染経路である男性同性愛者が引き合いに出されたが、日本では同性愛者という存在すら不可視であり議論の外に追いやられる存在であった。そこで、皮肉にも日本のセクシュアル・マイノリティの社会進出を目標に活動していたグループなどがエイズという社会問題を同性愛者に“わざわざ”取り込むことで逆に同性愛者という存在を一般社会に周知してもおうと試みたことが分かった。

森山(2012)にも述べられているように、ゲイに関する研究の多くは、一般社会からの差別論に根差したものが多い。2.2.3.で挙げたように、一般社会＝マジョリティから見た、同性愛者＝マイノリティという構図が多く、和田(1996)や桐原(2013)の研究では、異性愛者から見た同性愛者のイメージなどを取り上げている。一方で、福田(2008)や森山(2010)では、同性愛者から見た異性愛者とのつながりや、同性愛者同士の社会について述べている。ここで挙げたものはいずれも、異性愛者と同性愛者という真逆のセクシュアリティを持った二者間の関係性について述べている。

次に、森山(2012)では、ゲイ同士のつながりについて述べ、特権的な他者とのつながりと総体的なつながりという言葉を使って論じている。前者は、性的関係をもつ二者の関係を意味し、後者は友人関係といった二者以上の精神的なつながりという定義がなされている。主に、発展場とゲイバーというゲイ特有の二つの文化について取り上げている。ゲイ・コミュニティにおけるインターネットの革命性について述べられているものの、その記述は少ない。

2.3.2.と2.3.3.では、若年ゲイのインターネット利用目的についての先行研究を挙げた。ここに挙げた先行研究の中から、匿名性、年齢と距離、オンラインとオフラインの関係という三つの要素を用いて分類した。主に扱われているインターネット媒体は、ゲイ専用の掲示板などであり、SNSを大きく扱っていない。また、ゲイの関係性がインターネット上でのみ完結してしまう場合や、性的接触のみを唯一の目的としている掲示板などについて述べられているため、若年ゲイ・コミュニティの全体像を探るには不足している。

このように、インターネットを通じた若年ゲイのコミュニケーションやコミュニティ

を垣間見ることはできるものの、若年ゲイの現実社会とインターネットの関係を詳細に述べているものは少ない。特に、筆者が注目しているツイッターにおけるゲイ・コミュニティの成り立ちについて述べられているものは、筆者が調査した中では無い。よって、ゲイ研究やセクシュアリティ研究においてツイッターという媒体は新しいと考えられるため、研究の意義があると思われる。以上の先行研究調査から欠落している部分を踏まえ、以下のように研究設問を設定する。

2.6. 研究設問

1. 日本の若年ゲイは何を求めてツイッターでのコミュニケーションを行っているのか。
2. 日本の若年ゲイは、現実社会とインターネットにどのように関わり、コミュニティを構築しているのか。

3. 研究方法

3.1. 調査方法

本研究では、1. 日本の若年ゲイは何を求めてツイッターでのコミュニケーションを行っているのか、2. 日本の若年ゲイは、現実社会とインターネットにどのように関わり、コミュニティを構築しているのか。という二つの研究設問を明らかにすべく、質的研究の半構造化面接を用いて調査を行った。

筆者は、ツイッターを通じたゲイのコミュニケーションスタイルについて調査を行った。そこで、筆者自身もツイッターアカウントを開設し、筆者とフォロー・フォロワーという相互フォローの状態にある7名の調査協力者に対し、半構造化面接を用いて調査を行った。加えて、彼らのアカウントからもテキストを参考にして分析に用いた。心理学や社会学の分野において、同性愛の原因論や、同性愛者と異性愛者が関わる上での心理的な側面に焦点を当てた量的研究は少なからず存在する(例： 福田ら,2008; 桐原,2013; 和田,1996)。しかしながら、あくまでゲイというセクシュアル・マイノリティが研究対象であるため、さらなる外れ値としてマイノリティが産出されることを忌避し、対象に対してより深く理解をすることのできる質的研究を行った。また、インタビュー法として、構造化面接、半構造化面接、非構造化面接という三つが手法として挙げられる(猿橋,2012)。筆者はあらかじめ研究設問を設定した上で調査を行ったが、同時に新たな知見を得ることも目的としていたため、語り手の語りに柔軟に対応できるとされる半構造化面接を用いた。そして、半構造化面接によって得られた語りを、KJ法(川喜田,1967)を援用して、KJ法A型による図解化、それを基にした文章化(B型)といった分析を行った。

また、研究を進める上での認識論的立場についても記載しておく必要がある。筆者が今回調査協力を依頼した7名の年齢、性別、居住地などや、調査を実施した日時、場所などは様々なコンテキストのデータであり、それをもとにした解釈であるという認識を持つ。また、調査協力者がゲイ・コミュニティという特有の文化に依存しているため、イーミックスな視点からの語りがデータとして表出したわけであるが、考察および結論においては、筆者自身の主観も大いにその解釈の中に関与している。また、今回の結果について客観性や普遍性を求めることはなく、若年ゲイである7名の調査協力者の主観的な世界を探求することを前提としている。

質問項目については、若年ゲイのツイッター利用、若年ゲイの現実社会での出会い、アイデンティティ、関係性という四つに関して項目を作成した。以下は筆者が調査に用いた質問項目である。

インタビュー質問項目

1. ツイッターについて

- Q1.1. いつごろからツイッターをしていますか？
- Q1.2. なぜゲイ用のツイッターアカウントを登録したのですか？
- Q1.3. 1日にどのくらいツイートしますか？
- Q1.4. なぜあなたはツイートするのですか？
- Q1.5. 1日にどのくらいリプライしますか？
- Q1.6. 何を基準にリプライしますか？
- Q1.7. 一日どのくらいツイッターを閲覧していますか？
- Q1.8. 所有しているアカウントはいくつありますか？
- Q1.9. このうち鍵付きのアカウントはありますか？
- Q1.10. なぜ鍵を付けているのですか？
- Q1.11. 何を基準にフォローしますか？
- Q1.12. 何を基準にフォロー許可しますか？
- Q1.13. 何を基準でフォローバックをしますか？
- Q1.14. 何を基準に相互フォローしますか？
- Q1.15. フォローしている相手をブロックすることはありますか？
- Q1.16. どのような時にブロックしますか？
- Q1.17. どのような時にフォロー解除をしますか？
- Q1.18. 他者のツイートをリツイートする意味は何ですか？
- Q1.19. 他者のツイートをお気に入り登録する意味は何ですか？
- Q1.20. ゲイ用のツイッターアカウントにはどのような特徴がありますか？
- Q1.21. ツイッターによってゲイ・コミュニティはどうなりましたか？

2. 現実社会について

- Q2.1. 初めて自身以外のゲイと会ったのはいつですか？
- Q2.2. 初めてゲイと出会ったきっかけは何ですか？
- Q2.3. 一か月に何人ほどゲイに会いますか？
- Q2.4. ゲイの友人はどのくらいいますか？
- Q2.5. ゲイの相手に何を望んで関係を持とうと試みますか？
- Q2.6. これまで恋愛関係にあった相手はどのくらいいますか？
- Q2.7. ゲイと会う時はどのくらいの人数で会いますか？

Q2.8. (初対面のゲイと会う場合) なにを基準として会おうと試みますか？

Q2.9. ゲイと会う時何をしますか？

Q2.10. ゲイの社会にはどのような特徴がありますか？

3. アイデンティティについて

Q3.1. あなた自身を示すキーワードをできるだけ挙げてください。

Q3.2. その中から1つ大事なものを挙げてください。

Q3.3. ゲイとして生きていてよかったことを教えてください。

Q3.4. ゲイとして生きていて嫌なことを教えてください。

Q3.5. ゲイの友人と関わる時とゲイ以外の友人と関わる時、あなたはどのように違いますか？

4. 求める関係性について

Q4.1. ゲイとしてツイッターに何を求めていますか？

Q4.2. ゲイの現実社会にどのような関係性を求めていますか？

Q4.3. ツイッターと現実社会は何がどう違いますか？

Q4.4. ゲイ他者に求める関係性をできるだけ挙げてください。

Q4.5. その中から一番大事なものを教えてください。

3.2. 調査協力者

7名の協力者に対し、半構造化面接を行った。今回インタビューを行ったうち、Bさんを除いた調査協力者は自身をゲイまたはバイ・セクシュアルであると自称している。Bさんのみ性自認をトランスジェンダーとしているが、本研究ではBさんの性的指向が男性であるため、ゲイというセクシュアリティの中の枠組みとして捉えることとする。また、Aさん、Bさん、Dさんは現在大学に在学中であり、Cさん、Eさん、Fさん、Gさんに関しては社会人またはそれに準じた社会的属性である。対象の条件としては、19歳から23歳というゲイ・コミュニティの中で最も影響を持ちうる若年層である。面接日は、6月9日から7月3日までの約一か月間であり、面接時間は約30分から1時間程度を目安とした。面接終了から逐語録を作成し、分析する。調査協力者7名それぞれの居住地、年齢、恋人の有無、フォロワー数・フォロワー数についての情報を以下に示す。今回、年齢の項にはそれぞれの調査対象者の満年齢と共に、インタビューによって浮かび上がった平成何年生まれかということを示す「H○」というゲイ・コミュニティ独特の概念も表1に加えることとする¹⁵。さらに、セクシュアリティの項目では、G=ゲイ、B=バイ・セクシュアル、T=トランスジェンダーという表記をした。このある種の記号も、それぞれの調査協力者が所有しているアカウントに表記をしているものに準じている。

表1：調査協力者一覧

調査協力者	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん
居住地	愛知県	愛知県	愛知県	静岡県	千葉県	東京都	東京都
年齢	H8 19歳	H3 23歳	H5 21歳	H5 21歳	H7 19歳	H4 22歳	H4 22歳
恋人の有無	無	無	無	無	無	有	有
フォロワー数	100	150	300	500	180	600	480
フォロワー数	160	500	500	1,500	400	1,200	560
面接日	2015年 6月9日	2015年 6月10日	2015年 6月11日	2015年 6月27日	2015年 6月27日	2015年 6月29日	2015年 7月3日
面接時間	45分	69分	62分	57分	57分	66分	30分

ゲイのポジションについては先行研究の項でも述べたが、改めて記述する。ゲイのポジションは、男性役＝タチ、女性役＝ウケという二つに大別される。さらに、リバ＝タチでもあり、ウケでもあるゲイというポジションも存在し、「タチ寄りリバ」というポジション

¹⁵ 例えば、平成5年に生まれた人は「H5＝へいご」といったように彼らの中で分類化され、インタビューからも若年ゲイ社会の共通認識であることが確認された。今回面接に協力いただいたAさんとEさんは共に19歳であるが、それぞれ学年では1年の誤差が生じるため、AさんはH8、EさんはH7という表記で分類を試みる。

名によって曖昧さを残す形のものも見られる。この、タチ・ウケに関してはジェンダーの視点から見たものと、性的行為で見た場合など様々に議論されるが、あくまで本研究ではゲイという大枠の括りで彼らのコミュニケーションについて探求するため、その定義について詳細に論じることは避ける。

4. 半構造化面接の結果

4.0. はじめに

本項では、7名の調査協力者による語りを概観していく。質問項目が多岐にわたっているため、いくつかの質問項目に対する回答を区切って報告する。なお、筆者が説明の上で必要な場合、語りに下線を引いている。まず初めに、若年ゲイにおけるツイッターの語りを示していく。

4.1. 若年ゲイのツイッター利用

本項では、若年ゲイのツイッター利用に関する詳細な語りについて、いくつかの項目に分け概観する。

4.1.1. ゲイ・アカウント利用状況

本項では、若年による、ゲイ・アカウントの利用状況を概観していく。まず、Q1.1、Q1.3、Q1.5、Q1.8、Q1.9、Q1.10に係る回答を表1に示す。なお、海外および日本のゲイ・コミュニティに関する先行研究には「ゲイ・アカウント」について記載されているものがないため、本研究ではゲイ・アカウントを「ゲイが自らをなんらかのシンボルによってゲイと他に表明し開設・利用するツイッターアカウント」とする。

表1：若年ゲイのゲイ・アカウント利用状況

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん
ツイッター開始時期	1年前 (10代)	2年前 (20代)	5年前 (10代)	2年前 (10代)	4か月前 (10代)	5年前 (10代)	5年前 (10代)
1日のツイート数	0~4	10	10	20~30	5	1	2
1日のリプライ数	リプライされたら返す	リプライ>ツイート	ほぼ無し	リプライ>ツイート	リプライ>ツイート	リプライ>ツイート	リプライ>ツイート

所有アカウント数	1	4	1	3	3	6	3
表アカ	○ (×)	○ (×)	○ (×)	○ (×)	○ (×)	○ (○)	○ (○)
仲良しアカ	×	×	×	×	○ (○)	○ (○)	○ (○)
エロアカ	×	×	○ (×)	×	×	○ (○)	×

○、×は所持/不所持、(○)、(×)は鍵の有無を示す。

表アカ、仲良しアカ、エロアカと呼ばれるアカウントについては、p.36 図 2：ゲイ・アカウントの分類、を参照。

次に、Q1.7.「ツイッターの閲覧時間」に関しての語りは、いかに若年ゲイの中でツイッターが中心であるか垣間見ることができるため、以下に語りを交えて示す。なお、以降の語りで特に重要だと思われる部分に下線を引いた。

閲覧に関しては、もう暇さえあればみたい。授業中も見るときは見る。リプライとかツイートするとか置いとけば、ツイッターを閲覧するっていうことに関しては結構してると思う。(Aさん)

見てるのは、全部自分の、なんかタイムライン出てくるツイート全部読むんで、1時間以上は絶対、2時間。毎日。いや、もう、細切れで。電車に乗って、暇だったみたいなのピッて見て、で学校終わった、でピッてある程度全員見て、家帰ったらピッて全部見て、みたい。朝起きたらピッて見て。そうですね、習慣。(Bさん)

暇なときは見てる。サファリとかでサイト見てるよりも、ツイッター見てる時間の方が長いと思う。携帯いじって誰かとやり取りしてる以外はツイッター。(Cさん)

やっぱり暇なときは割と見てるかな。(Dさん)

寝てる時以外はほぼ、チラッと見たりする。(Eさん)

トータル的な時間で言えば多分2時間とかじゃないかな。暇なとき。通勤中とか。(Fさん)

時間にしたら1時間ぐらい。電車で移動中、朝、帰りくらい。あと寝る前もちょっと。

(Gさん)

上記の語りが示すように、彼らにとってツイッターならびにゲイ・アカウントの存在は毎日の生活の中において欠かせないもの、もしくは習慣となっていることが分かる。参考として、株式会社I&S BBDO(2014年5月)によって18～69歳男女2,500名(全国)を対象に行われたインターネット調査では、18歳から24歳の約30%が毎日ツイッターの閲覧および投稿をしていると回答しているが、本研究の調査協力者によれば若年ゲイのつながりにおいてさらに高い利用率を示すであろうことが語りから考えられる。Cさん以外については閲覧するアカウントに関して、つながりはゲイのみであり、ゲイ他者のツイートをほぼ全てに亘って「監視」していると言えるだろう。この回答から分かることは、「ゲイとしてのツイッター利用の頻度が多いこと」、「ゲイ他者のツイートを常に把握していること」と考えられる。この質問において、Dさんが唯一「閲覧しないとき」ということを次のように語ってくれた。

1人るときは、全体的に1人の時は見るけど、誰かと一緒にいたらまあ使わないかな。

(Dさん)

Dさんにとって、ツイッターを閲覧するのはあくまで1人であるときであり、誰かと対面で会っているときに共時的に利用するわけではないようだ。また、それぞれ年齢の開きがあるものの、Bさんを除いて他の6名の回答からゲイ・アカウントを登録した時期について10代であることが分かる。なお、Bさんは10代より掲示板を通じて出会った恋人がいたため、ゲイ・アカウントを登録したのが比較的遅い。

表1でAさん、Bさん、Cさんの三者とも鍵付きのアカウントはないことを、他の4名に関しては、アカウントごとに鍵を付けているか否かについて示した。Aさんは現在鍵アカウントを持っているわけではないが、過去にアカウントに鍵を付けていたことがあると語った。アカウントに鍵を付けるという動機について、Aさんの語りとはほぼ一致していることをDさんも語っているため、まず2名の語りを以下に示す。

一時期(鍵を)つけてた時もありましたけど。地元の友達にゲイ・アカウントがバレてしまうと思い、鍵を付けた(Aさん)

それは、最初付けてなかったけど1回知らない間に中学高校の同級生がこのアカウントを知らない間にフォローしてて、ビックリしてそれからずっと付けてる。

(Dさん)

A さん及び D さんはツイッター・アカウントに鍵を付けていない場合、ゲイ以外からも閲覧されてしまうという性質に危険性を感じている。A さん及び D さんは異性愛者と関わる生活においてカミングアウトしていないので、ゲイ・アカウントで自身が投稿しているゲイとしての生活や、ゲイのフォロワーとのつながりを隠すためにアカウントに鍵を付けていたと推測される。ここでの二者の鍵を付ける理由を端的に示せば、「自身の、ゲイとしてゲイと関わり、ゲイに対しツイートしている内容を異性愛者の友人などに見られることへの危機回避」であると言えるであろう。

次に、「異性愛者の友人からの視線」ということに特化していない理由を語ってくれた、F さんについて以下に示す。以下の語りは、あくまで F さん自身がゲイ・アカウントにおいてのゲイ他者について語っていることを前提とする。

①やっぱりこの世界怖いから。②やっぱり知らない人に見られたくないし。③自分がいいなって思う人とは繋がりがたくないし、見てほしくないから。同じ理由でもあるし、勝手に全く知らない人にフォローされるのが嫌だから。許可していきたい 1 人 1 人をちゃんと。(F さん)

F さんのこの語りから筆者は三つの要素を取り出してみる。①「この世界（ゲイの世界）が怖い」という F さんのゲイ・コミュニティに対する認識、②既知でない他者からツイートを見られることへの拒否感、③ツイッターでつながりを持つ相手を選別したいという欲求である。F さんが 10 代から 20 代初頭にかけて、新宿二丁目で店子と売り専ボーイという職業に従事していたことを踏まえ、①のようなゲイの世界を語っているのは興味深いことである。次に、②のような語りは、ツイッターにおける他者からの目の介在についての危険性を示唆していると言える。特筆すべきは、③についてである。筆者は別項目で設けた質問において、ツイッターの長所と短所を各調査協力者に問うているが、F さんが語った③についてはツイッターの長所とも短所とも解釈し得る特徴だと言える。ツイッターにおいて、つながりを持つ相手を選別できるというのは、相手に求める関係性の如何は別として人間関係を構築する上で有意義と言えるのではないだろうか。つまり、自分の目的に合致する相手や、自分の好みおよび利益など諸所の面で好都合に人間関係を構築できる可能性を孕んでいると言える。これに関しては、現実社会のあらゆるしがらみの中で生きていく場合等価的に代替できるとは言い難い。職場や学校などの様々な各個人が所属する社会においては、このことは成立しづらい。それに引き換え、F さんのツイッターに関する語りに依拠してみると、ツイッターは人間関係の煩わしさからの解放を利用者に与えてくれている。一方で、つながりを取捨選択することがとりわけ容易なツイッターでは関係の希薄さも浮き彫りになるのではないかと指摘することができる。このツイッターの短所と言える点は他の質問の項で詳らかに述べるため、ここでは割愛する。

4.1.2. ゲイ・アカウントの意味

本項では、Q1.2.「なぜツイッターを登録したか」、Q1.4.「ツイートの意味」、Q1.6.「リプライの意味」について概観する。三つの質問項目に関連する語りによって、若年ゲイにとってなぜツイッター利用しているのかという意味について説明を試みる。

①ツイッター登録理由

Aさんは釈然とした理由がないものの、Bさんは以下のように述べている。

結局、他のゲイの人、関わりを、知り合いになりたいとか友達になりたいとか？

Bさんの発言から、ゲイ・アカウントを登録することは、一種の出会いツールとしての位置づけであることが分かった。

また、次にあげる、Aさん、Bさん、Cさんを除く他の4名は、ゲイ・アカウント開設について周りの影響があったことを示唆している。

自分の話とか、同じような人たちが結構いる、結構ツイッターが流行ってて、やってみよと思ってやってみた。(Dさん)

俺もあれなんです、友達に勧められて、その同じ(ゲイの)友達に勧められたから始まった。勧められたっていうか勝手に登録された。(Eさん)

周りがやってたから。ただ周りがやってるから、周りと繋がるため。(Fさん)

みんながやれやれうるさいから。全部全部(のアカウント)。(Gさん)

このように、ゲイ・アカウントを登録した理由について「ツイッターの流行」や「他者からの影響」について述べている。こうした登録理由から、昨今の若年ゲイにとってツイッター登録はゲイ他者と繋がることと直結し、ツイッターがゲイ・コミュニティにおいてつながりの役割として機能していることが分かる。

さらに、先行研究の項でも挙げたようにゲイであることに関わらず、ツイッター自体の流行についてGさんは次のように述べている。

なんか(高校を)卒業して mixi、なんかだんだん mixi が廃れてって、みんなツイッターにしなよって言うんでツイッター始めた感じですね。

Gさんの発言から、ゲイの中でツイッターが別段台頭したという流れからゲイ・アカウントを登録したのではなく、社会全体の SNS の流れが mixi からツイッターへとシフトしたことが垣間見られる。

さらに、Bさんはゲイ・アカウントの登録理由として、「一般社会で自身がゲイであることが露見することへの危険性」についても語っている。

誤ってフォローしてしまうみたいなのもあるし、誤フォロー的な。じゃあ別のアカウント作ろうかなと思って。(間違えて B のリアル・アカウントでゲイ・アカウントをフォローしてしまうと) マズい。履歴残るし、検索履歴が。

また、Cさんの場合は現在筆者が知り得たアカウントについては「ゲイとの関わり専用」ではなく、自身の友人や親せきにまでつながりが及ぶと述べている。しかしながら、Cさんは「裏アカ」と呼ばれる別のアカウントを所有しており、そのアカウントはゲイ専用であると語っている。

一応、普通のノンケの人でもいいから、その、本垢¹⁶はね。それではできないことを、やっぱり（裸体を）晒したりとかするのに、そこ（本アカ）でやってたらさ友達もいるし、いともいるし、フォロワーにそれは見られたらマズいわけじゃん。

Cさんは、Aさん及びBさんが所有していない種類のアカウントを所有しており、Bさんの「一般社会で自身がゲイであることが露見することへの危険性」とは異なる「不特定多数の人に欲望が丸出しの自分が露見することの危険性」という目的でアカウントを使い分けていることが分かる。

続いて、「ツイートの意味」についての語りを以下に示す。これに関して、Aさんは次のように述べ、「他者から興味を持たれたい」ことを示唆している。

共感してほしい、これにビックリしたよみたいなことをツイートしてる。ちょっとでも目に留まってればいいかなくらい。
ツイッターで、自分に興味を持ってほしいみたいなものもあるんじゃないかなって。

また、Cさんに関しても、Aさんと同じような感情からツイートをしていることが分かった。Cさんは以下のように述べている。

¹⁶ 調査協力者の語りを尊重するために、語りの場合のみ、「アカウント」をネットスラングである「垢」という表記にする。

なぜツイートするか。ええっと、まあ自分の楽しいことがあったときは、楽しいことをみんなに、なんだろう見てほしいっていうのもあるし、なんだろう、やっぱ返しが来ると嬉しくないことはないから、いいなって言われるのも良いし。で、なんか自分の考えとかをまあ一言で呟いて、相手がそれに共感してくれるのも嬉しいし、それに対して意見くれるのも嬉しいから、そうだね、うん、自己満だね。

Cさんの回答から分かることは、「自分が楽しかったことをフォロワーに見てほしい」、「自分のツイートにリプライが来ることは嬉しい」、「自分の考えを一言でツイートして相手がそれに共感してくれるのも嬉しい」、「(Cのツイートに)意見をくれるのも嬉しい」、「自己満足である」というものである。この五つの具体的なツイート原動力は、Aさんの「他者から興味を持たれたい」という感情と同じものであると考えられる。つまり、AさんとCさんのツイート原動力は、「他者に反応してもらうことで満たされる自己」であり、他者に影響を与えたいなどのツイートをするのは少ないと考えられる。

また、Gさんにとってのツイートというのは単なる暇つぶしであることが下記の発言から分かる。

なんで？暇だから？暇だから。

Gさんにとって自身がフォロワーに向けて発信する情報であるツイートに特に意味は持たせていないのであろう。それに加え、Gさんは他者の情報を晒すことを目的としてツイートを行っていたことがあるということについて語った。

自己顕示欲の塊の奴の鼻をへし折るため。だからさ、前は自分自称金持ちですって奴がいて、そいつに被せてツイートを毎回してたことがあって、そいつの鼻をへし折ったりとか、ツイートをしていく中で矛盾点を見つけて、そいつの矛盾点とか、あとGoogleの画像検索を使ってそいつが本当はどういうところから画像持ってきたかって言うのを晒し上げにして楽しんでました。

この語りから分かるように、Gさんは自身の情報をフォロワーに伝えるということに加え、いわゆる「晒し行為」を行って楽しんでいたようである。晒すという行為は、他者に何らかの負の意識を持たせるという、他者に対する一種の攻撃であると言える。後項でも取り上げるが、ツイッターにはリツイートと呼ばれる情報拡散機能があり、本来単にフォロワーやその他に向けて情報を共有または報知させる機能であると思われるが、それを逆手にとった行動であると言える。

②リプライの基準

本項では、ツイートに対する反応の一種であるリプライについてその基準を明らかにしていく。そこで、主に Q1.6.によって得た語りを示す。リプライは、リツイートやファボ¹⁷と同様ツイートに対する反応であるが、リプライ自体もツイートであることを前提としておく。

A さん、B さん、C さん、D さんに関しては「自身のツイートにフォロワーからリプライが来ていれば返す」ことが共通してみられる。まず、B さんはリプライの基準について以下のように述べた。

時間が空いてて気になるツイートがあったら、それにリプをするしって感じで多分。

B さんは「自身が気になる内容をツイートしている」ことを基準として他者へリプライを送っていることが分かる。次に A さんの場合、リプライの基準として「フォロワーとの関係性」について語っている。

仲良かったら、まあもちろん仲良かったら面識とかあれば、一回会ったことあるとか、ちょっと遊んでみたり、お互いどういう人か分かってるからよく、リプライ結構しやすいけど。会ったこと無い人はそんなに。目に留まったらする。ツイート内容に関係して、リプライしやすいやつで。

A さんは、会ったことがあるフォロワーと、会ったことがないフォロワーでリプライのしやすさに差異があることを語っている。仲が良かったり会ったことがあるフォロワーについてはお互いをよく知っているためリプライすることが多いが、会ったことの無いフォロワーに対しては目に留まった時とさらに、ツイート内容がリプライしやすいものという二つの条件が付与されることを挙げている。A さんの場合、現実社会の関係性がツイッターでのリプライの面に影響を与えていると考えられる。また、A さんは上記の「リプライの基準」に加え、「リプライを避ける場合」について以下のように語った。

さすがになんだろうな、ここで自分がリプライしとったら同じ人に何回もみたいなのは避けてると思う。

リプライに関するこの質問で、「リプライを避ける」ということに関して述べた A さんによってリプライをする対象が毎回同じであることを避けるということが分かった。A さん自身の語りからその要因を読み取れるわけではないが、他項目の質問において他の調査協力者が答えているツイッターの特徴から説明を試みたい。Q1.5.に挙げた B さんの語りで、「一対一のやり取りで奥まで踏み込まれたくない」というものが見られる。これを筆者は「一

¹⁷ ツイッターで、お気に入り登録と呼ばれる機能である。

対一のやり取りに対する疲弊」と解釈した。つまり、ここでの A さんの語りにおいて、何度も同じ人に対してリプライを避けるというのは、A さん自身もツイッターにおけるやり取りの緩さを感じているためにこのような行動をしていると考えられる。

ここで特筆すべきなのは、E さん及び G さんが語る「仲良しアカ」の特徴はネガティブなものを内包しているということである。「仲良しアカ」という名前で筆者は定義したものの、その実として、「愚痴や悪口」を発信できるアカウントとしても有用なのである。彼らの「仲良しアカ」にはそれぞれフォロー・フォロワーが少なからずおり、仲が良い＝愚痴や悪口などのネガティブな面も見せられる相手ということであろう。これは、ゲイに限った話ではないが、アカウントの使い分けという概念をできるだけ細分化するために考察した。

最後に、この質問に対する回答から次のようにゲイ・アカウントを分類する。

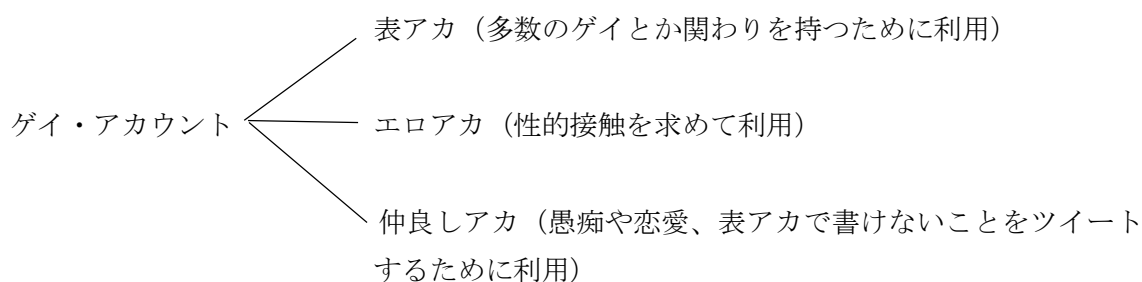


図 2：ゲイ・アカウントの分類

続いて、ツイートの意味に関連するゲイ・アカウントの特徴について述べる。

4.1.3. ゲイ・アカウントの特徴

本項では、主に Q1.20.の質問に関連する語りによって明らかとなった、ゲイ・アカウントの特徴について説明する。

最も多く語られたのは「自撮り」についてである。「自撮り」は主に自身の顔写真を自分で撮ることである。まずはゲイ・アカウントでの自撮りの多さについての語りを示す。

①自撮り

ゲイ用のアカウントは、まあ男なのに、こうなんていうのかな、自撮りというか、自分の写真を撮って、こうあげ、ツイッター上にこう、ツイートとして流して一っていうのがすごい多いなーと思う。(A さん)

自撮りの文化がある。うーん普通のアカウントに比べたらねたぶん。女の人、普通の—
女の人の一、現実の一アカウント？よりもたぶん多いと思う。(Bさん)

なんかまあ無差別についていうかもうたぶん周りも知ってて—、了承してるんだな—って
いう子は一顔出してる子もいるけど—、そういう、子はほんとに一まあ可愛い自撮りを
してますよねえ (Cさん)

アイコンは自撮りですね。(Eさん)

自撮り多くない？僕クソ多いもん。不細工が自撮りしてると鬱陶しいからな。(Fさん)

とりあえず、無駄に自撮りが多いよね。(Gさん)

このように、自撮りの多さについてだけでも 7 名中 5 名がそれを認識していることが分
かる。ゲイ・アカウントに特徴づけられる自撮りの多さについては、なにがそれを起因さ
せているのであろう。それを論じるにあたり、ツイッター以前の掲示板での出会いについ
て語った B さんの語りを付け加えた上で論じる。

掲示板だと—もう全く—対一のやり取りで—、いくらでも嘘が言えて—、年齢、もそ
うだし—、身長体重もそうだし—顔を、顔ですらそうだし—

この「掲示板だと嘘が言える」ことが自撮りの多さに結びついていると考えられる。ツ
イッターにおける写真掲載数の多さが、信頼度に大きく関係しているわけである。先行研
究によっても、現在のゲイの出会いとしてインターネットの介在を欠くことはできないこ
とは明白である。さて、そのインターネットの介在を必然としたゲイの出会いにおいて、「顔
写真」は生命線ともいえるであろう。昨今、スマートフォンによる GPS 機能付きのゲイ専
用アプリケーションが隆盛を見せているわけであるが、そこにおいても「顔写真」による
他者の判断が主に占めている。アプリにおいては、タイル状¹⁸に各登録者それぞれのアップ
ロードした写真が表示される。誰かが各登録者のページに飛ぶか否かは、その写真に係っ
ているわけである。

また、会うことを前提にネットを利用している場合についても「顔写真」の重要さは他
の判断材料を圧倒しているともいえる。現在のゲイ・コミュニティにおいて、出会い方は
「出会い系サイトまたはアプリ」というものが主で、そこに掲載される虚偽の写真による

¹⁸ 利用者がアップロードしたプロフィール写真が距離の近さから順にタイル状に表示され
る。

詐欺の回避としても自撮りが多くなされるのかもしれない。Bさんの語りのように、掲示板では1枚のみの顔写真をアップロードしてそれに誰かが呼応し、個別にメッセージを送ることで二者間の出会いが成立する。しかしながら、Bさんがいう本人とアップロードされた写真を同一化する術としては、掲示板の1枚の写真では非常に不安であることは明白である。

さらに、掲示板における虚偽の写真または情報への危険についてBさんは語ったが、それに付随する形で、なぜ自撮りの多さというゲイ特有の文化が隆盛したかについてCさんの語りも一助を与えてくれるため以下に示す。

プリクラは最近減ったね。うん、プリクラは、信ぴょう性があが、みんなさーやっぱ言うじゃん（写真を）交換する時とかーあの、えプリじゃなくて写メ？！ってのがあるからたぶんー、たぶんーみんな写メに今移ってきてる昔は、プリクラが多かった。

(Cさん)

この語りからも分かるように、現実に出会うという前提を持ってインターネットを利用しているゲイにとって、写真の信憑性がいかに重要かは明白である。そのことについて、自撮り掲載者と閲覧者の二者で見ると、前者の場合、「いかに自分が良く撮れているか」を重視していることに対し、後者では、「いかに与えられた写真がその人の現物と合致しているか」ということに焦点があてられるわけである。自身が興味のある相手とコンタクトを取ることや、実際会ったりすることを自然発生させることはゲイ・コミュニティでは容易ではない。再度になるが、セクシュアリティは、異性装をしたりすることなどを除いて不可視なため、街中にあふれている人を一瞥して「あの人はゲイだ、ノンケだ」と判断することはできない。よって、ネット・コミュニティに陥入し、ゲイである前提を予めもって、出会いを構築するのである。しかしながら、そのような出会いでは、顔写真によって自身を判断されることが頻発するため、自撮りに対する彼らの努力は命がけであると言っても過言ではないのだろう。さらに、提示された自撮りが本人と同定できるかどうかは、好みではない人同士が会ってしまうというミスマッチを回避でき得る。インターネットでの出会いにおいて、別人の写真を使用している人がいることも可能性として大いにあり得る。バーなどにおいて対面でゲイと出会うことが減少している現在、自撮りが多くなっている発端としてネットを通じた出会いの危険性に着目することは意義があるだろう。

続いて、自撮りに対しての評価についてである。前記した「出会い系に対する危険回避」の視点に加え、他者からの評価という視点での自撮りについての語りを示す。

あ、やっぱりそのじど、そのじ、画像付のツイートに、をみんながリプライをするとかー、あとはー、お気に入りっていうのがあります、あるんですけどー、その、数であったりとかー、なんだろう、うーん、そういう数、やっぱ数字で見えるっていうの、とこ

ろとかがやっぱりあれなんじゃないですか、無いと。(Aさん)

Aさんの語りでは、ファボが自撮りに対して与える評価について語られている。端的に示せば、「ファボが多ければその人の自撮りまたは、その人自身の評価が高いと認識される」ということである。つまり、自撮りをする側も、その評価を気にして精いっぱい努力をしていると考えられる。ファボ数やリプライ数という量的な判断によって自己評価を得たいという動機から行っている自撮りの多さという視点である。

それに対し、自撮りに対する質的な側面でのファボについての語りを示す。

そう他者のアカウントが—その人の—自身の—自撮りが載ってて—、ん—で、それをファボったり—それは—、ん—、義理？自分も—、自撮りを載せたときに—、ファボしてくれてるんで— (Bさん)

可愛くなくてもファボとかリツイートとかしてるよね。写真とかそれはみんなそうか。御慈悲？ (Dさん)

先述した、Aさんによる「フォボの多さ＝人気」という概念に対するその内実について語られた。このような相互的なファボのやり取りに果たして評価という基準があてはめられるのであろうか。Bさんによる「義理」や、Dさんによる「慈悲」から生起している自撮りへのファボという数にとらわれない質的な視点も見落としてはならないだろう。

続いて、上記の自撮りに関連して、Q1.8.でも触れた「エロアカ」での画像投稿についての語りを以下に示す。

きったない写真。行為の写真だったりとか、不細工の自撮りだったりとか。電車でさ、見てるじゃんツイッターを。隣いるじゃん。パツつって、パツつって開いたときとか、ピコーンって突起物とか映っててみ？マジ焦るからね。冷や汗どっぷりだからね。(Fさん)

Fさんは、TL (タイム・ライン) に卑猥な画像が流れてきて、それを不意に閲覧してしまうことを危惧している。性という社会において秘匿されるもの (この文言が十全にどの社会にも当てはまるわけではないが) もツイッターにおいては他者に見せやすい。もちろんこれはツイッターに限定したことではないが、インターネットでは本来隠すべきなどと社会的規範によって抑圧されている部分が露呈してしまいがちなのである。もちろんこうした行為は、法的に許容されることではない。現に、ツイッターにおいて卑猥な画像を掲載していたことによる逮捕者も出ている。しかしながら、本研究はあくまで、若年ゲイのコミュニケーションを有体にするのが目的であるため、その違法性について詳細に問う

ことは割愛する。

次に、ゲイ・アカウントにおけるプロフィールについて詳細に述べている語りを以下に示す。

②ゲイ・アカウントのプロフィール

うん、なんかもう、平成何年っていう、あー。へええ、あ、Hでか、始まりー、そのあとに数字、それから自分の何だろう身長体重とか書く人もいるし、あとー、なんだろうバイな、バイなのかゲイなのかみたいな、BかGで表記するってのもある（Aさん）

あでもゲイのアカウントの自己紹介の仕方とか？身長体重年齢？をー、プロフィールの欄があってーそこに。だいたい。163スラッシュ48スラッシュ19スラッシュみたいな。笑い。って入れたりーあとー、ゲイだとーG? って書いてあったりー、最近はでもー、組員とかー、ねー。減ったなー。でもだからGって書いてあったりー、Bって書いてあったりー（Bさん）

あとねー、プロフが書いてある。例えばー、H5平成五年。平成五年ー、165、点、で年齢、あとー、なんあの一、なんだろう、年齢ーは、その紹介文に書いてあるんだけどー、名前の所にー高校何年とかあ大学何年、大学何年生みたいなのとか高校何年生とかー、あとー、はー、えっとー、いついつにどこに行きますよ何日からみたいなのっていうのを書く人が多いねそれは、繋がってる友達がーたぶん、いっぱいいると思うからーいろんな、地にね。いると思うからその人たちにアピールでー、うん。ってこと帰るから、遊びましょうよっていう（Cさん）

みんな年齢とか体重とか身長とかどこ住んでるとか、割と個人情報載してる、ツイッターに書いてある。自己紹介みたいな。平何、1706224とかそういう感じ。みんなもそうなんかな、どうなんだろう知らない普通のアカウントもそうなんか分かんないけど。あとどこ住んでるって絶対ついてるかな。あとは、Gとかそういうの、俺も付けてる。このアカウントしかもうやってないからさ。（Dさん）

上記の4名が語った、ゲイ・アカウントのプロフィールの内実である。そこで筆者はこれらの語りと各調査協力者のアカウント及びツイートから読み取れるものをもとに、仮のプロフィールを作成した。



図 3：ゲイ・アカウントプロフィール例

上記の語りから得た情報に準じて筆者がゲイ・アカウントのプロフィールを模して作成した。それでは、図 3 を参考にして、4 名の語りを整理してみる。

まず、「①身長体重年齢」についてである。これはゲイ特有のプロフィールであると考えられるが、ゲイか否かを判断することに加え、個人の嗜好するタイプというニュアンスも内包されている。もともとツイッターはゲイを専用の対象として作られてはいないため、アカウント所有者は「私はゲイである」ということをカミングアウトしていない場合、なんらかのシンボルによって示さなければ他者からゲイと認識されない。さらに、この身長体重年齢は、アプリケーションや掲示板においても用いられるシンボルであり、「この人の体型はいかなるものであろうか」や「この人と年齢がどの程度離れているのであろうか」など様々な錯綜した個々のタイプという嗜好による判断基準となるようである。

次に、「②H○」についてである。A さん、C さん、D さんによって語られた、平成または H という表記は、一見年齢を表すだけとして見なされ得る。しかしながら、彼らは「何歳」と「平成何年生まれ」の間には大きな差異を見出している。これに関しては、いわゆる「学年」などによって分けられるのと類似している。筆者を例に挙げれば、1991 年、平成 3 年、3 月に出生しているが、彼らの基準において筆者は H3 に分類されない。筆者は 3 月の出生であるため、早生まれであり、学年としては平成 2 年生まれの人たちが同学年の中でマジョリティとなる。そこで、筆者は平成 3 年生まれであるにもかかわらず、H2 に組み込まれるといったわけである。確かに、2015 年 8 月現在、筆者は 24 歳であるが、例えば中学校の同級生でも 25 歳の人は存在するわけである。ゲイの場合は、何かに所属しているわけではないため、共通項としての学年認識が強く表れているのであろう。

「③居住地区」についてである。これについては、D さんのみ語りで示しているものの、ほとんどの場合が居住区についてプロフィールを示している。例えば、TKY=東京、OSK=大阪、NGY=名古屋などを暗示している。これは、アプリケーションのような GPS 機能が付いていないツイッターにおいて、当事者同士の居住地区間の距離を示すことに一助を与えている。さらに、この居住地区に付随して、C さんによる「いつどこへ行くか」を記載している事例についてである。C さんの語りから、居住地区間の距離が離れているもののツ

ツイッターでの距離間の無関係さを例示していることが分かる。GPS 機能によって、自身と近距離にいるゲイと容易に出会うことが可能であったゲイ専用アプリであったものの、その反面遠距離の相手とは出会うことがないということが生起していたわけである。しかしながら、このように表示名に「〇〇へ行く」と表記することで、広く可視化された状態にできる。例えば、筆者は東京都に在住であるが、ツイッターは地域を限定しているわけではないため、どこかへ赴くときにその地のゲイと出会うことも容易である。アプリが可能にした至近距離の出会いを、逆行する形でツイッターはつながりに広がりを持たせている。

次に、「④学年の表記」である。筆者は仮に大学 2 年生といった形で表記をした。これは、先述の①、②における年齢について補足するものである。今回は B さんのアカウントをもとに大学生を用いたが、他に学生を示す、LDK=Last Danshi Koukousei=高校 3 年生や、DC=Danshi Chugakusei といったものも見られる。この項で特筆すべきは、B さんについてである。語りにおいては詳細に語られなかったものの、B さんは現在大学を卒業し、他大学に新たに入学したため、年齢は 23 歳である。しかしながら、彼はゲイの「若さ」への固執を既知している。そのため、確かに大学 2 年であることに間違いはないが、2 回目の大学 2 年といったわけである。このまやかしくも受け取れる記載にも、B さんの年齢への執着を見て取れるわけである。さらに、DK や DC は単純な年齢を示すものというよりも、一種のブランドとして明記したいという欲求から生起していると考えられる。

続いて、「⑤G または B 表記」についてである。G=Gay、B=Bisexual を意味する。これは純粋にセクシュアリティの表明である。重複になるが、ツイッター=ゲイ専用ではないために、他者がゲイかどうかを認識し、また自身もゲイであると認識されるための表記である。ここで追記すべきは、G であろうと B であろうとその違いについてはさほど問題ではないことである。あくまで G または B は性自認であり、つながりを持ちたいと思う相手から見ても、特段どちらであれば、つながる・つながらないといった判別は下されない。よって、仲間かどうかを示すシンボルにしか成り得ないのである。

続いて、フォローとフォロワーに関しての語りを以下に示す。

③フォロー数とフォロワー数の関係

あ——。あ——、あの一、フォローとフォロワーの数——？が——、フォロー、の方が少ない、と——、信頼度が上がるのかな——？あれは。あ——。なんだろうな——、まあでも信頼度かな——自分——、の場合はん——例えば——、え信頼度じゃないなあ。絡みの濃さ——？知名度もある。そう。フォロワーの方が多い時——、あ——この人、知られ、てるんだな——みたいな。(B さん)

やっぱフォロワーいた方が見栄えはいいから。良くない？あ、この人半分フォローしてるけど半分フォローしてないってなったら、あ理想高い人なのかなとか、こだわりがあ

るとか、いろいろ思うじゃん。さっき言ったじゃん、ちょっとその、やっぱり一緒に
というのが嫌なの、フォローとフォロワーが。 (Fさん)

BさんとFさんから、フォローとフォロワーの数の差が何らかの意味を持っていることが分かるであろう。Bさんにとって、フォロー<フォロワーというアカウントに対しては「知名度」の問題を起因させるようである。また、Fさんにとっては、フォロー<フォロワーの構図によって自身のイメージアップを図ることを意識している。「見られている」という概念を挿入して言い換えれば、フォロー＝自身が見ていることよりも、フォロワー＝自身に興味を持っている人に見られている方が多いということはそれが知名度や見栄えに繋がると判断していると思われる。Fさんは、フォローを厳選している＝理想が高い、こだわりがあるという意味付与を行っている。さらに、フォローとフォロワーが同数であることに拒否反応を示すほどであるため、強い意味を持っていると考えられる。

続いて、リツイートに関連するゲイ・アカウントの特徴についてGさんは以下のように語った。

何リツイートでモザイク取りますって言いながら、そのリツイート数に達してなくても、モロ画載ったりとか、かな。

リツイートは情報を拡散させる機能であることは先述した。この機能を使ったゲイ特有の現象と言っても過言ではないのがGさんの語りである。これは、ある人が陰部にモザイクをかけてそれをその人自身が設定したリツイート数に達した場合モザイクを取った写真を掲載するというツイートに関して述べられている。リツイートやファボの項でも扱ったが、リツイート数およびファボの数は量的な判断の上で他者からの人気などの評価とみなされるため、それを伸ばすために「エサ」として下半身の画像を掲載するという現象である。リツイートによってリツイートした人のTLに晒され、掲載主にとって新たなフォロワーを獲得できるという利点も内包されている。これは他者の目に触れることに対する一種の努力であると判断することができる。こうして、フォロワー数が多い方が高評価である→裸体などを載せることによるフォロワー数の増加→さらにフォロワー数が増え、また高評価につながるという循環である。

次に、自己開示の中でも、自己顕示欲によってツイッターを利用しているという特徴についての語りを示す。自己顕示欲によるツイッター利用についてはFさんとGさんが以下のように語った。

④自己顕示欲によるツイッター利用

あと、見栄の張合いじゃないみんな。今ここにいます、これを食べてます、何してます

みたいな。良いものをとかね。要するに自慢の場だと思うけど。自慢の場だったり、
(Fさん)

とりあえず、みんな自己顕示欲すごい。なんか、アイツに勝とうっていう意識がみんなあってツイッターをやってるんだとか。(Gさん)

二者の語りによって、「ツイッターが自慢の場」である要素が見えてきた。このように明白にツイッターを自己顕示の場であると語ったのはFさんGさんであるものの、他の項目での他の調査協力者の語りも最終的に自己顕示に帰結すると言っても過言ではない。例えば、「ファボをどれだけ他者から受け取ることができるか」「いかに自撮りをして評価してもらえるか」「フォローよりフォロワーが多いと見栄えが良い」など、ツイッターの特徴に自己顕示の概念を介在させてみても枚挙にいとまがない。これは、ツイッターが他者からフォローされている限り、単なる自己完結のための媒体ではないからである。写真や文章を投稿するにしても、単に保存しておける媒体ではなく、他者へと見せることに大きな意義がある。

続いて、上記の他者へ自己顕示することから起因する行為の連鎖についてFさんが以下のように語った。

けど、ツイッターとかSNSが与える社会現象とかすごい高いと思うし、オカマちゃん（自称。ゲイと同義）がね、くことって絶対連鎖するから。誰か1人が例えばこの映画を観てきた超良かったら、絶対連鎖する。みんなそれに興味を持ちちゃう。人がやってることとかをするのが、好き、のが多いからオカマちゃんは。

Fさんが語ったのは、ゲイが発信する情報が連鎖または感染する現象についてである。自己開示のみに留まらず、情報が次から次への伝播していく様はゲイという狭いコミュニティにとって必然であると考えられる。自身が何らかのこだわりを持って何かを嗜好することより、他者がしているからそれに乗じることによってマイノリティとしての連帯を図っているともいえるのではないだろうか。

続いて、フォローとフォロワーというつながりがどういったものであるかを語りによって示す。

4.1.4. フォローとフォロワーの関係

本項では、ツイッターのつながりを形成する、フォロー（能動的）とフォロワー（受動的）な営為について語りを用いて概観していく。そこで、Q1.11.、Q1.12.、Q1.13.、Q1.14.の四つのフォロー・フォロワーの関係についての質問項目からの語りを統合して説明する。

①フォロー基準

これに介して、7名の内、Dさん、Eさん、Fさん、Gさんの4名が語った「フォロー基準は顔である」というものを先んじて以下に示す。

俺は、まあ写真だよね。あっ綺麗と思って、顔とか。まあ顔ですよ、顔。(Dさん)

全く自分から、新しいのは顔。(Eさん)

やっぱりイケメンでしょ。第一はそっから(顔)入っちゃう。(Fさん)

ゲイのアカウントは、可愛いなと思ったらフォローするし、(Gさん)

この4名についてはみな、第一のフォロー基準は顔で判断を下すということで一致している。改めて筆者の見解としてフォローという行為を定義すると、つながりが無い相手に対して自己が能動的につながりを持とうとする行為を示す。

上記の「顔で判断すること」に対し、AさんとBさんは意見を異ならせている。Aさんはアカウントが挙げている写真をフォロー基準とし、Bさんはツイート内容によってフォローを行うと語っている。まずAさんの語りを下記に示す。

仲良くなれそうなみたいなの、画像欄とか、画像欄とかだと特に分かりやすいんですけど、その人が画像欄でいわばその人が見てほしい、あれをあげるわけじゃないですか、ツイートする。だから、そういうので、なんかこう趣味というかー、なんだろうな、こう、えなんていうんだろ、仲良くなれそうな人を見てフォローする。鍵付きをフォローする時は相手が(フォロー)してくれた時に気になるなーって思ってフォローするみたいな感じですね。

Aさんの語りからは、鍵無しのアカウントをフォローする際には対象のアカウントが挙げている画像を参考にフォローすることを述べている。その理由として、画像はアカウント所有者が見てほしいという欲求から挙げていて、挙げられている画像から自分と趣味が合い、仲良くなれそうな人であると特に判断しやすいということが分かる。つまり、Aさんにとってフォローをする判断は、自身と共通の趣味があるかどうかを基準としているようである。あくまで、画像は相手の顔についてと特に言明しているわけではない。Aさんの相手が挙げている画像によって相手の趣味や自分との共通項を探ろうとしていることと類似するのが以下に示すBさんのフォロー基準である。彼は画像という基準を包括する形としてのツイート内容をもって他者をフォローすると語っている。

ツイートの内容が。顔は一、顔は一、顔で選んでたら一、すごい数になっちゃうんで一。だから一しかも顔で選んでも一、別にね一、面白くないツイート見てもしょうがないし一。すごい、あっこの人面白いこと考えるなって人一？だと一自分からフォローしたいなとは思うけど一なかなか一、出て来ないというか。

Bさんはフォローの基準は相手の顔写真によって行っていないと語った。Bさんはフォローする相手に、ツイート内容の面白さを求めている。さらに、先述の「フォロー基準は顔である」4名に相反する形でそれに対して忌避を覚えている。上記のAさんとBさんと語りにおいて両者ともが大枠としての「ツイート内容>相手の顔」ということが読み取れる。Bさんの語りでは「顔で選んでたらすごい数になっちゃうし、面白くないツイートを見ても仕方がない」とのことが述べられ、「顔で判断を下す」ことにつながりの浮薄さを認めていると言えるのではないだろうか。

②フォロー許可

この節では、フォロー許可という鍵を外し相手に自身をフォローすることを許可するという鍵付きアカウント特有の条件のもと調査協力者に質問しているため、アカウントに鍵を付けている若しくは、付けていた方の語りを記述する。今回の面接調査でその対象となるのは、Aさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさんである。Aさんに関しては、過去にアカウントに鍵を付けており、それ以外の調査協力者に関してはアカウントごとに鍵が持つ秘匿性の扱いが異なるため、下記に語りを示す。

鍵付きだったときは一、まず相手の一、顔が分かること、かな。

なんか例えば相手の一、なんだろうサム、サムネイルというか一その、トップ画面みたいなのが一、顔とかだったら一許可は一、しやすいかなとは思う。

(Aさん)

イケメン。(Fさん)

相手の顔。それだけ。(Gさん)

Q1.11.において、筆者はフォローを自己の能動的な行為と捉えた。それに対し、フォロー許可の場合は、相手にフォロー申請されてそれを許可するか否かであるため、受動的な行為だと定義することができる。FさんとGさんの語りにおいては、両者ともQ1.11.のフォロー基準と同じく「顔で判断を下す」ことを語っているものの、Aさんの場合はそれが逆転している。つまり、能動的な行為であるフォローの場合、顔は判断基準でなく、相手との

趣味などの一致をもとに行っているが、それに相反する受動的なフォロー許可の場合、相手の顔によって判断を下すという逆転が起きている。

次に、鍵アカウントを所有する中で Dさんはフォロー基準の「顔で判断を下す」場合と翻って、フォロー許可基準を次のように語った。

俺は全部許可しちゃう。もうとりあえず自分の中学とか高校とかの友達とかじゃなかったとしたらだいたい許可しちゃうけど。

Dさんのアカウントはフォロワーが 1,500 人を越えている。つまり、1,500 人以上の他者から見られているわけである。そして、Dさんは中学や高校の友達でない限りはフォロー許可を出すと語っており、相手を選別する基準は異性愛者の友人か否かに限っているようだ。既出の 3 名とは異なる点である。筆者はフォロー許可を、一方的にフォローされている状態ということを前提に質問しているため、ここでは「フォローされているがフォローしていない」に限っている。Dさんのフォロワー1,500 人に並んで多いのが、Fさんの 1,200 人である。Fさんはこの項目で以下のようにも語った。

やっぱフォロワーいた方が見栄えはいいから。良くない？あ、この人半分フォローしてるけど半分フォローしてないってなったら、あ理想高い人なのかなとか、こだわりがあるとか、いろいろ思うじゃん。

Fさんはフォローが 600 人、フォロワーが 1,200 人で「フォロワーがフォローの 2 倍」の状態である。Fさんもまた Dさん同様、1,200 人という多数の他者から見られているわけである。ここで、Fさんは「フォロワーの多さによる見栄え」という概念を語った。彼の語りでは、フォロワーが多いことが彼自身の満足感に繋がったりするというよりも、フォロワーの多さによって他者からどう判断をされるかということが動機へとつながっていることが分かる。「理想高い人」、「こだわりがある」などの語りは、能動的な行為であるフォローが少なく、受動的な行為であるフォロワーが多いことは、彼が容易に能動的な行為を行っておらず、何らかの厳格な基準においてそれを行っているとは他者に知らしめたいのである。その実、彼が明確なフォロー基準を持っているかどうかは別として、「他者からそう思われたい」という動機が働いていることが分かる。

次に、相手のプロフィールをフォロー許可の判断材料にする場合について Aさんの語りを示す。

うん、それぐらい。あと一、なんだろう、年とか一？なんかプロフィールとかがちゃんと書いてあると一なんかこう、そのあと、たとえばフォローされて、なんかフォローしやすいなとか分かんないけど。

Aさんはツイッターのゲイ・アカウントについてゲイ特有のプロフィールがあることについて語っているが、その詳細は他項目で示すことにする。そもそもツイッターは、ゲイ専用アプリなどと前提が異なっている。ツイッターはゲイを利用対象とし、ゲイのみに特化したツールではないからである。アプリで出会う相手とつながりを生成しようとする場合、ある人とある人はお互いがゲイであると既知してコミュニケーションを図るであろう。しかしながら、ツイッターは何も書かれていないまたは、ツイート内容が不可視などの場合、相手がゲイであるか否かを判断しなければならない。Aさんにとって、ゲイ以外とつながることを現在のツイッターアカウントに求めているため、まず相手のセクシュアリティを知ることも大きな判断基準となるのである。

③フォロバック基準

この「フォロバック」というのはフォローの一種と考えて良い。「フォロバック」は、相手にフォローされてそれに対してフォローを返す/返さないという行為である。つまり、フォローとの違いは順序または時系列という点であると言っても良い。さらに、相手へ抱く興味関心も異なっていると思われる。「フォローする」と「フォローされたからフォローを返す」という行為は大きな差異があるであろう。そこで筆者は、Q1.11における「フォロー」を「相手にフォローされる前に自発的かつ先んじて行ったもの」と各調査協力者にその場で定義づけているため、区別して論じる。

まず、Aさんによる「年齢」を基準とした判断についての語りを示す。

何を基準にフォロバックしますか。うーんまず、年齢がある程度近い、っていう、うん。さすがになんか40、40歳50歳とかは一、なんかフォロバックするメリットがないというか、っていうかその人のツイートを見たいとたぶん思わないから一、そういう意味では一フォロバックはしない。

Aさんは、自発的にまず40代50代のゲイをフォローしないことが分かり、さらにフォロバックも行わない。その理由として、「その人のツイートを見たいと思わない」という理由を挙げ、ツイッターでつながること＝相手を監視することともとれるであろう。彼のつながりを構築したい相手は比較的年齢に近いゲイに限られることも分かる。

次に示すのは、Bさんの語りである。Bさんのフォロバック基準からは三つの要素を取り出すことができる。

何を基準で？最近は一、リプーくれて一、2、3回、で一、んーと顔写真一がちゃんとあって一、2、3枚。であと一なんだろう、なに選ぶだろうあと一。ちょっとちょっと見ていいですか？で一誰々、誰かのー裏垢だったり一。

まず初めに、①リプライを 2, 3 回くれた場合、続いて②顔写真が 2, 3 枚掲載されている場合、そして、③誰かの裏アカである場合である。まずは①について、D さんも語っているため以下に記す。

俺一回でもリプライとかが来たら絶対返す (D さん)

ここで考えられるのは、フォローバックはリプライを通じた何らかの他者からのリアクションを基準としていることである。既出の「他者の監視」のみの概念でツイッターでの関係を完結させていないパターンとして捉えることができる。B さんと D さんにとって、コミュニケーションを図ることがツイッターでの「つながり」と認識され得る。このことを、逆手に取っているとも捉えられる F さんの語りを示す。

(フォロバしてない人とは) 絡まないし、でもましては、自分がフォローしてないから見れないわけだから、で勝手にこう絡んでくるし、ああ、ありがとうございますみたいな。そうしてると、みんなフォロバしてほしくて絡んでくるのやたら。

F さんは、B さんや D さんのようにリプライをしてくれた人をフォローバックするとは語っていないものの、フォローバックしていない他者が F さんにリプライというリアクションをすることで、F さんにフォローバックしてもらおうと試みていることを知っている。次に、②顔写真による判断を行っている B さん以外の調査協力者の語りを挙げる。

イケメン。イケメンと、画像見て一回あっちも鍵付きだったらフォロリク送って、許可されて画像全部見て、あっ全然詐欺写メだったらすぐ外すけど。外しちゃう。(F さん)

(フォロバ) 相手の顔。(G さん)

F さんの語りに注目したい。F さんの「顔」という判断基準がいかにシビアなものかが明快にわかるのではないだろうか。彼は他者からフォローが来て、それを一旦許可し、さらに相手をフォローバックすることで一時的に「相互フォロー」の状態を作る。しかしその段階においては、つながりを持ちたいわけではなく、あくまで F さんをフォローした相手が鍵付きアカウントで内容が不可視なためにそれを閲覧するためだけにフォローバックをしている。そして、次の段階として、相手のツイートしている中の顔写真を見て、「詐欺写メ」と呼ばれるものであった場合、つながりを即座に断ち切ってしまうのである。「詐欺写メ」とはあまりに加工されていたり、角度や光を巧みに利用して被写体である本人がより良く写っている顔写真を指す。いかに、ツイッターでゲイとつながるときに、顔の判断が

ものを言うかが分かるいい例である。

また、Fさんは動機についても語っている。

この人会ってみたいとか。そういうなんか興味を持つ感情が生まれた場合は許可する、許可っていうかフォロバする。

顔という判断基準に加え、ツイッターのつながりを通じて現実において対面で「会ってみたい」という感情が生まれることによって、インターネットから現実社会へのつながりの可能性を孕んでくる。それに加えて、何らかの興味を相手に持つ場合もフォローバックすると答えている。この点については、他の調査協力者も語っている。

それかー自分の興味がある人？例えば音楽やってますとかーなんか、っていう人はするピアノ弾いてますとか音大生ですっていう人は一、自分に共通して自分の興味があること一を書いてる人は一、その人の様子を見てみてーあまりにもおかしくな一おかしい人だったらしなければーまあ、ある程度ちょっとこの人を一監視したいなって思う人はする。(Cさん)

CさんはFさんの相手への興味がフォローバック基準になっていることに加え、自身との共通項を視野に入れ、相手がおかしな人か否かを判断し、監視したいという動機からフォローバックする場合について述べた。

次に③誰かの裏アカである場合については、最近裏アカを作成したEさんが語った。

僕もそう。仲良しアカは、だから、てかまだフォロー申請来たこと無い。自分からフォローして、フォロバされて許可する。

Eさんは所有しているアカウントの内、唯一仲良しアカだけに鍵を付けている。

4.1.5. ブロックとフォロー解除

本項では、ブロックとフォロー解除という関係性の断絶について語られたものを示す。また、ブロックとフォロー解除の間には同じ関係性の断絶といえ、なんらかの差異が見られた。そこで、Q1.15.、Q1.16.、Q1.17.の語りを用いて概観していく。

①他者をブロックすること

ブロックというのは特定他者に対して自分のツイートや、フォロー・フォロワーを不可視にできる機能である。この質問では、調査協力者全員が「ある」と語った。そして、そ

の詳細に関しては次の質問項目で聞いているため、次に詳らかに示すこととする。

「ブロック基準」

前項で、調査協力者全員がブロックしたことの経験があると語った。まず初めに、AさんとCさんが語っていることに共通の問題が見られるため、以下に示す。

最初あっちから20代の人で、前半でフォローしてもらって、でー、その一なんだろう、フォローバックの基準とかじゃないけど、まあプロフィールしっかりしてて、書いててなんかこう、顔が載っててみたいない感じだったんでフォローバックしましたー、でーそのあとにこう、なんか、ディー、ダイレクトメッセージっていう機能がツイッターにあるじゃないですか。他人の目に触れないみたいない、でそれでなんか、会おうみたいない、なんかまだそんなに絡みもなかったけどーもうなんか、お互いのことよく知らないのにーなんかすごい、会いたがってきてー、までもー会ってみないと実際どんな人か分からないってのもあるしー、と思ってーとりあえず、そんなときはー会おうって言われたけど、えなんだろう、日程とかは全然決めてなくて、でもなんかとりあえず早く会いた、なんか本当に早く会いたがってて相手が。なんかlineも教えてよみたいない。しつこかったからー、もうlineも教えたんですけど、まそしたらまあlineでも、ますごいんですよ。なんかえーなんか、も、いつ休みなのーみたいない、なんか、で早く会おーみたいない感じだったからー、なんかそれが怖くなってきてー、あーもう、うわーってなってー、lineもブロックしー、ツイッターもブロックした。(Aさん)

なんだろう。しつこい。あの一、遊ぼとか、そういう目的で自分はやってないからーその、そこで、初リアル¹⁹するとかっていうのを、目的としてやってないからー、会おうって人とかー、しつこい人はー、したりとか (Cさん)

AさんCさん共に、ツイッターで知り合い、会うことを執拗に迫られた場合にブロックを行ったと語った。Aさんについては、ツイッターを通じて現実社会で会うことを厭うことはないが、Cさんについては、ツイッターの目的が現実社会で会うためではないと語る。2人に共通するブロックの原因は「会うことに対するしつこさ」からきている。Aさんはオフラインでゲイとリアルした経験がまだ少ないためということが関連しているとも考えられる。ツイッターのインターネット社会と現実社会で会うというオフラインな行為の間に大きな壁を感じているわけである。また、執拗に会うことを強要されるかのごとく相手から迫られてそれを恐怖に感じている。しつこさに対する気怠さではなく、恐怖という概念が鍵となるのだ。Cさんは、もともとツイッターで新たに会うことを目的としていないため

¹⁹ リアル＝ゲイがオフラインなどで出会ってから現実社会（リアルな場所）で会うこと。

に、相手との目的のミスマッチ（相手はツイッターを通じてリアルしたい）から起こっているのである。先述の Q1.12.で示した、ツイッターがゲイに特化または専用でないのと同様に、ゲイの中ですらツイッターに求める目的が違うのである。ゲイ専用アプリであれば、「友達募集」、「恋人募集」、「セフレ募集」など出会いの目的別に相手とつながることができるが、ツイッターの場合それを明確に示すことは表アカである場合できないことが多い。そうした諸般の理由からこういったミスマッチからのつながりの断絶が起こりうるようだ。このように、現実で会う/会わないことから生じ得るブロックに続き、ツイッター外、つまり現実社会でのできごとによって生じたブロックについて、BさんとGさんの語りをあげる。

ブロックすることは一、今までしたことあることな一、あーありますあります。一回。一回とりあえず思いつくのは一回だけ。それは一、その人と仲が悪くなって一あーあし、遊ん、現実社会で一、会って一、で仲が悪くなった？（Bさん）

ケンカしたとき。（Gさん）

このように、両者とも相手と仲が悪くなったまたはケンカをしたときにブロックを行ったことについて語った。新宿二丁目などのゲイ・タウンにおいて、セクシュアリティをもとにした生業をしている以外のゲイとして生きている人々は、毎日周りにゲイがいて接しているとは考えることはできない。なぜならば、「ゲイ」として「ゲイ」を理由に所属する場所は無く、単に「ゲイ」というセクシュアリティは属性ではないからである。今回の調査協力者も各々学生として学校に所属し、社会人として会社に所属している。学生であれば、ほぼ毎日学校の友人というつながりを持ち、社会人であれば、ほぼ毎日会社の同僚というつながりを持つ。そうした中では、ある種の強制力（学校に行かなければならない、会社に行かなければならないという）が働いているため、一朝一夕に関係を断ち切ることはできないと考えられる。しかしながら、毎日ゲイの友人とつながりを持ち、顔を合わせることがない人々は、このようにつながりを断ち切ることも容易であると言える。ケンカをしたらそれっきりでも済むという関係の希薄さとも受け取れるわけである。いわゆる、バツの悪さを感じることも少ないのかもしれない。

続いて、Eさんが語ったつながりの断絶について下記に示す。

自分からブロックは、1人だけしかなくて、友達にひどいことした人を、1人ブロックした。

Eさんが言うところの、ブロックはEさん自身の感情に基づいたものではないことが伺える。あくまで、ひどいことをされたのはEさんではなく、Eさんの友人であるためであ

る。E さん自身が体験したひどいことではなく、あくまで友人を介在した他者の評価を行っている。これについて同様に、C さんも関係を切ることに以下のように語った。

やっぱ、思うじゃん。あの子、あの子そういう子なんだよって言われたら、あーそうなんだあじゃあフォロー外そーとか。絶対実際あると思うしー (C さん)

これは、E さんのブロックの原因を端的に示す例として読み取ることができるのではないだろうか。他者からの噂によってツイッターでのつながりに終止符を打つことは往々にしてあるようだ。それも、会ったことがない相手に対してであるがため、関係を断ち切られた側は弁解や説明もできずに噂が独り歩きしてしまう危険性に常にさらされているわけである。

次に、F さんの見られることへの忌避から生じるブロックについての語りを示す。

見てほしくないとき。だって自分がさ、フォロー解除したとしてもあつちは見れてるわけ。それを一回遮断するにはブロックするじゃんね。でも、もう嫌だ気持ち悪い、だからそれでストーカーとかも出てきちゃったから、ここら辺に住んでる何してるツイートを見てすぐ LINE 来る。今何してるんだって一みたいな。そういうウザい人を切ります、僕。

F さんはツイッターを通して、ストーカー行為を受けたことについて語った。他者によって彼の居住地や生活を覗かれ、その情報によって個人的な被害をこうむったわけである。彼がツイートしたことに対して即時に他者からそれに関する個人的な連絡が来るというのは、いかにツイッターが F さんの今に同定されるのが分かる。それに加えて、個人的なやり取りへの煩わしさも読み取ることができる。F さんは「今何している」ということを他者の目に触れさせる行為＝ツイートする割に、そのことに関して個人的に他者から連絡されることを忌避している。自身の情報を共時的に多数の他者へと晒すことを望むが、特定他者へ向けたものではないということがツイッターの特徴ともいえる語りであろう。

最後に、G さんが語ったツイッターでの「晒し」行為に関わるブロックについて示す。

ツイートがウザかったときとか。ツイートがウザかったとき、そいつを晒し上げにして満足したとき。

G さんはある相互フォローの相手をブロックしたときの経験について語った。その語りはあまりに内容が他者の特定に繋がるほど詳らかなため、筆者の判断でここに記載するのは割愛する。その代替として筆者が概要を述べる。語りは、G さんの相互フォローの相手のツイートがあまりに矛盾点が多く、欺瞞に満ち満ちていたため、G さんが相手の他のツ

イートをスクショ（スクリーンショット）して痛烈に批判したのち、それを不特定多数の他者の目に晒し、一定の満足感を得た後に相手をブロックしたという内容を語っている。Gさんにとって虚偽の上作り上げられた自己顕示欲を切り崩すことが一種の快感への結びついていることが分かるわけである。さらに、ツイッターの特徴である多数の他者へ情報をほぼ強制的に提供できるという利点を転用している。Gさんにとっては快感の一種であるものの、往々にしてこの機能を利用者が各々既知のはずゆえ、みなそれへの恐怖心もあると考えられる。つまり、ツイートの良し悪しについて思慮しなければ、様々な意味での身の危険に常にさらされている状態であると言えるのではないか。

②フォロー解除

前項のブロックとは違い、フォロー解除というのは単純にフォローしている相手を外し、相手のツイートを自身のTLに流させないという行為を指す。ブロックが相手から自身を不可視な状態へと導くならば、フォロー解除は自身が相手のツイートを見ることがないというのが相違点と言えるであろう。しかし、逆に相手が自身のフォローを外してない限り、相手は自身を監視し続けることができる。まず初頭に、アカウントの状態という視点で語った、Aさん、Bさん、Cさん、Eさんの語りを以下に示す。

まー、フォロー解除。そうだな、なんかもうその人のツイッターがまず、ツイッター自体が更新されてないとか。なんかリプライもしてなければ、ツイートもしてないみたいなのは、ま、すごいなんか二か月ぐらいそういうのがあるんだったらー、僕は外してるかなーと思う。(Aさん)

そう自分がフォローしてるアカウントが一、眩かなくなっってー、んで一、二か月経ってーるなーと思って、やめたのかな？って思って、フォロー解除したリー、なんだろう。それくらい？(Bさん)

なんか全然、もう死んでる、アカウントだなーと思ったとき。全く更新されてない。あ違うアカウント他にあるんじゃないかなーって。(Cさん)

俺は、活動してなかったらだいたい外してます、相手がツイートが何か月前とかだったら外しちゃう。(Eさん)

4名いずれの調査協力者もフォローしているアカウントが更新されているか否かでフォロー解除を行うかどうかを判断している。このことから、フォロー解除も能動的な行為の一種として捉えることができる。ただ単に相手をフォローして関係が完結してしまうわけではない。相手がツイートを主にしたツイッターでの活動を行っていない場合、フォロー

しているのが無意味として受け取られ、それによってフォローを外すことは関係を一方的に切ることを意味するのである。ツイッターを利用しているこの4名にとって、アカウントが更新されているか否かは、Cさんの言葉を借りれば、相手が生きているか死んでいるかという概念に直結し得るのである。つまり、そのままの言い方をすれば、死人と繋がる意味がないということであろう。4名の語りは、お互いにつながっている状態を一方的に断つ、または相手の生活を見る必要がないと判断することからフォロー解除を行っている。いわば、つながりの質に関する要因から行われるものと受け取ることができる。続いて、フォローしている相手が生きているか死んでいるかに関わらず、相手からフォロー解除された場合にフォロー解除したパターンを語ったCさんとFさんの語りを示す。

えーっとねえ、たまに「フォロワー見て」、向こうからフォローしてきたのに、リムられて²⁰たりとかー (Cさん)

まず相手にフォロー解除されたときもそうだし、僕今自分だけがフォローしてるのって4人ぐらいしかなくて、それって好きな歌手だったりとかはさすがにやっぱりねえ繋がれない。だからその4人以外を除いては、あのあるじゃん？フォロワーチェックみたいなアプリ。フォローチェックのアプリがあって、お互いにフォロー、僕の場合ね。あなたが片思いされているってことは、僕のことをフォローしてるけどフォロバしてない人が504人、であなたが片思いしているのが5人。それってもうほんとに好きな歌手の配信とかにして、えお互いにフォローしているのが676人。だから、これを全部足すとフォロワーの人数、そうだね、フォロワーの人数になる。だから僕基本、僕がフォロー許可してフォロバしないか、お互いフォローしてるかしらない。自分だけがフォローしてるっていう人はいない。あと、こっちから申請送って許可だけされた場合も切っちゃう。 (Fさん)

先述したフォローを能動的な状態と定義した上で、さらに付加するとすれば、相手に興味を持って行う行為がフォローである。つまり、フォロー解除をする側は、「あなたにもう興味がないですよ」、「あなたの日常に即しているであろうツイートを見る必要がないですよ」という意思表示をしていると考えられる。この二者の語りの見地から見てみれば、相手にフォロー解除された＝あなたとつながってたくない、と相手から意思表示をされたためにそれに対して即座に解除を返すという行為である。つまり、自身が興味のある・知りたいと思う相手を一方的にフォローするのでは飽き足りないのである。彼らにとって、あくまで相互フォローの状態が至高であり、例えば「片思い」状態はつながりの意味をなしないと認識すると考えられる。

次に、ブロックとフォロー解除の関係について語っているCさん及びDさんの語りを示

²⁰ リムーブ＝フォロー解除。

す。

あり、ますね。あるあるあるそれ。フォロー解除をするのは一、だいたい一、あつ待つてブロックする、のもある一。ブロックして一ブロックしてはず、ブロックを外して一、で向こうも一こっちをフォローしてない状態にする？いやしたことはあるんですけど一、たぶん一昔一に一、今ただフォロー、解除するだけなんですよ。でも昔は一フォローバックして一あちゃーちゃちゃーふおちゃー、ブロックして一、でそのブロックを解除して一、でお互い何もない状態？、に一、することが一、たま一にあった。でも一その違いは一今となつては一よく分からない。(Cさん)

俺ブロックのままっていうのはないんで、自分鍵が付いてるから一回ブロックして、お互いフォロー外してブロック解除する。ブロックっていうのは俺の中ではフォロー外すだけ。すぐ戻す、ブロックっていうのはなんかかわいそう。(Dさん)

この二者の語りでは、ブロックより平易で比較的对手を傷つけない手法としてのフォロー解除が語られている。つながりの断絶というよりは、つながっていない状態に回帰させる方向に視点が向いている。また、Dさんによって「ブロックはかわいそう」という語りがなされ、相手への配慮が見られる。ブロックというお互い完全に不可視な状態を忌避し、いったんブロックし解除することによってお互いをフォローしていないだけの状態に戻すことを目指している。

4.1.6. リツイートとファボ

本項では、ツイッターのリツイート機能と、ファボ（お気に入り登録）機能について、若年ゲイがそれをいかに利用しているかを語りから示す。

①他者のツイートをリツイート

リツイート（Retweet）は再度を意味する接頭辞 Re に喩く＝Tweet となり、あるツイートを再度引用してツイートすることを示す。ゲイ用のアカウントでの特異な現象という語りは少なかったが、以下に各調査協力者の語りを示す。まず、Bさんによる自己紹介としてのリツイートという語りを示す。

ん一、共感？と一、きょう布教？だったりふきょう、ふきょうは一、普通の、ゲイアカウントに一、aiko をフォローし、あの一、歌手？で一、その一aiko 好きな人が一、ぱらぱらっというし一、自分が、aiko 好きだっていう。なんて言うの。え一、言葉が出て来ない。aiko 好きだっていう一、なんて言えばいいんだ。自己紹介的な。そうそ

うそうそうそう。こういうライブー、があつてこういうグッズが、売り出されますみたい。でー、aiko 好きにはー、その布教、だしー、んでーしない人にはー、aiko 好きだっていう自己紹介だしー。

特定の意味を持ったツイート了他者へ拡散することによって、それになぜ自身が注目し、リツイートしたかという意味付けすることによって相手に自身の情報として置き換えさせ、周知してもらう目的でリツイートを行っている。B さんの例を直接用いれば、自身がツイートで aiko が好きであると呟くよりも、aiko 本人のツイートまたは情報開示をリツイートすることで、前者よりも強い意味付与がされ、自身が aiko 好きであることを他者からも意味づけしてもらい、認知してもらおうとしていると考えられる。また、「布教」という B さんの言葉は、情報拡散という意味合いを持っているのであろう。共通の趣味持っている友人たちに、報知するためのリツイートである。後者の場合について、D さんと F さんも同様の動機からリツイートを行うと語っている。

俺はだいたいリツイートするのは画像が多いかな、動物の画像とかが多い最近は。ただみんなに見てほしい、この可愛い動物、それだけ。(D さん)

一番するのは面白い動画、vine とか。(F さん)

B さんのパターンと同様、見られたいという動機から行うリツイートである。D さんと F さんもポジティブな内容を他者に報知したいことから生起している。B さんがリツイートによる自己紹介という概念を応用すれば、特に D さんの可愛い動物をリツイートすることによってそれを見ている他者は、D さんを可愛い動物が好きな人であるという判断を下すこともあり得る。

続いて、上記のポジティブなものをリツイートするのとは打って変わって、悪意の意味付与から行われているリツイートについて、C さん及び G さんの語りを以下に示す。

馬鹿じゃない？って思ったときのーそのーなんて言うんだ、意地悪じゃないけど、意地悪じゃないけどー、なんかあ、こいつ馬鹿やんみたいな笑い。感じでーどうしたい？馬鹿なのを広めたい。だから、おかしいこと言っとるなーみたいなー例えばー？ケンカしたときとかにー、自分の悪口言われててー、それを、逆にリツイートみたいな (C さん)

こいつバカだよなーっていうんでリツイートするのと、この前ってつい最近、つい最近ここ 2, 3 日だよ、なんかさ韓国のだ、ローマ法皇の銅像建ったの知ってる？なんか韓国人が足伸ばして、ローマ法王がその足にキスしてる銅像を建てたわけ、韓国で。それに対してさネトウヨたちが、「ついにローマ法王まで敵に回した、こんなに見下して」

ってやってるんだけど、あれって実はローマ法王が訪韓したときに実際にクリスチャンにやった洗礼式なわけよ。それをそういう事実を無視して、そういうことを呟いてるから、こいつらバカだよなとか。自分たちに良い様にしか物事解釈できないよねっていうので、リツイートをしたり。 (Gさん)

この語りは、情報拡散というもののの中の、「晒し」と呼ばれるものに分類される。非常にネガティブな動機から行っているリツイートである。

次に、ゲイバー店舗アカウントのツイートをリツイートしている F さんの語りを示す。

お店のものとかはしてあげるかも、パーティがありますとか、そういうのとかは全然する。(店のやつは) 仲良いから。まあやっとならばさ、良い顔されるしね。そのリツイートの主、まあ世話んなってるってのもあるしね。飲みに行ってる、まあこっちはお金出して行ってるかもしれないけど、やっぱり接客だってしてくれてるわけだし、仲良いし。お店と店員とお客さんっていう関係にはなりたくないから。やっぱり世界だって狭いから。他のかかわりだってやっぱり持ちたいじゃん？飲み屋だけのかかわりじゃなくて。そういう意味でも。

Fさんは、義理に近い感覚で馴染みのゲイバーのツイートをリツイートしていると語った。リツイートによって情報拡散を行うことで、情報開示主への媚び諂いをしていることが分かる。具体的には、ゲイバーの周年および、バースデーパーティや店子出勤に関するツイートをリツイートという、一種の儀礼的とも取れるリツイート形式が存在する。さらに、Fさんの「客と店子関係になりたくない」というのは、いかに二丁目というコミュニティを構成するのが内輪の集団であるかを窺い知れる。ゲイ同士である場合、店子も客も、ゲイという共通のセクシュアリティをもとにしているため、金銭の授受によって完結してしまう関係に陥ることに抵抗があると考えられる。また、「世界だって狭い」とゲイ・コミュニティのことを表現し、そのコミュニティに陥入し上手くやっっていく術としてリツイートを行っているのである。まとめると、ゲイ・コミュニティという狭い世界の中で、義理や体裁を重んじ、「いい顔される」ためという他者からの目の介在のために、馴染みのゲイバーのツイートをリツイートし、情報拡散を行うことを Fさんは語った。

②他者のツイートに対するファボ

前項のリツイートは、他者への情報拡散を主とした目的の機能であるが、お気に入り登録（またはファボ）、はそれをした側とされた側以外の第三者の目に触れることは基本的に無い。全く不可視とまでは言い切れないものの、リツイートのように TL に流れることは無い。そこで、ファボについてどのような意味付与をして行っているかをそれぞれの調査協力者からの語りを用いて示す。まずはポジティブな意味付与からお気に入り登録について

語られているものを示す。

あーお気に入りかー。共感？自分の。(Bさん)

嬉しい時が多いかも、ファボは。その例えば一誕生日おめでと一って言ってもらったりとか一、なんか、あと一今日一緒に出かけ、て一こういうことがありました一っていうまあ日記みたいな感じで一写真が付いてたりとか一自分と一緒にいるときの、写真とか一？その一思い出みたいな感じで一書いててくれたときは、一、ま嬉しいし一、
(Cさん)

俺は、単純になんか面白いとか、単純にお気に入り。良いなと思ったりとか。(Dさん)

あとまあ写真付きだったら可愛いなとか。(Eさん)

面白いと思ったらお気に入りしとけば (Fさん)

お気に入り登録は、例えば友達とご飯行ったりして、友達が写真挙げてたりとか、自撮り挙げてる子が可愛かったりとか。(Gさん)

このように、各調査協力者それぞれのポジティブな意味付与でのお気に入り登録についての語りを示した。まず、Bさんによる同意や共感を示すもの、CさんとGさんによる自身が介在するツイートに対するもの、DさんとFさんの「良いな」と純粋に思うもの、EさんとGさんの対象の自撮りが可愛かった場合に分けられる。この中で筆者が注目したいのは、「自身の介在をもとにしたファボ」である。前者における、Cさんの語りの中で、「自分が一緒に写っている写真を載せてくれるのは嬉しい」という語りが見られた。Cさんはある相手とその人と自分が一緒に写った写真を TL に流してもらうことについて嬉しいと語り、その行為に特別な感情を抱いている。そこで、この行為について付け加える形で語っているGさんの語りを示す。

意味？とりあえずない。写真だって自分が持ってるわけでさ、

例えば、友人関係または知人関係にある二者が食事を共にした場面を考える。そこにおいて、その二者が一緒に写真を撮ったとしても、それは二者個人間で共有すれば「写真を共有する」ことは完遂できる。そのことをGさんは語った。しかしながら、上記のCさんのように、あくまで二者個人が被写体となっている写真を TL に流してもらい、二者以外の他者の目に触れることで高揚感を得ている。ここで限定すべきは、二者の写真を自身が TL

に流すのではなく、絶対的に流してもらうという前提によって“嬉しい”という感情が生まれることである。まとめると、自身と撮った写真を TL に流してもらうことに嬉しさを感じ、それに対する応答という形でファボを行っているわけである。

上記までで、若年ゲイのツイッター利用に関する語りを説明した。次の 4.2.において主に若年ゲイ・コミュニティについてその特徴を説明する。

4.2. ゲイ・コミュニティの特徴

この項では、特に若年のゲイが構築しているコミュニティについて語りをを用いて説明する。筆者の質問項目の中で Q2.2.に関連する語りを示す。

筆者は、Q2.2.「出会いのキッカケ」において、調査協力者がゲイ他者と出会いを持った媒体について語られることを想定していたものの、その実「会ってみよう」と試みた心情や理由」などを語ってくれた協力者もいた。そこでまず、媒体について語られたものを以下に示す。

①ゲイの出会いの媒体

掲示板。(B さん)

いろいろまあその時携帯持ってたから調べるじゃん？そこで出てきたのが COOL BOYS っていう掲示板で。(C さん)

ネットでネットで、昔だからアプリも違うけど違うやつ。(D さん)

インターネットでそういう掲示板があって、会ってみたいと思って。自分のことを紹介したら、LINE 交換しよみたいの来て、それでやり取りしてる内に会いました。

(E さん)

調べて掲示板みたいな。(F さん)

掲示板。一番初めては、先輩だよ。(G さん)

A さんを除き、6 名の調査協力者がゲイ他者との最初の出会いがネットを介したものであったと語った。さらに、D さんを除いた 5 名に関してゲイ専用の掲示板が最初のキッカケであったと語った。特筆すべきは、前項でも上がったようにそれぞれ世代が異なっているにもかかわらず掲示板を介した出会いが最初であったことであろう。C さんによって、

「COOL BOYS」というゲイ専用の掲示板の存在が明らかになった。「COOL BOYS」は現存するゲイ専用掲示板である。D さんにおいては、ゲイとの最初の出会いがネットを介在したものであると語ったが、他の 5 名とは異なり「現在のアプリと違うもの」と語った。D さんの語ったものは、ゲイ専用掲示板である可能性は低い。D さんの場合、主にパソコンを経路とした掲示板以降に出現した、ガラパゴス携帯用の GPS 機能が付いたサイトであると思われる。筆者が知り得た限りでは、ゲイのネットでの出会いにおける変遷は、掲示板→GPS 機能付きのウェブサイト→スマートフォンでのアプリケーションとなっているため、D さんの出会いを GPS 機能付きのウェブサイトと推察する。また G さんの語りの中で、「一番初めては先輩である」というものがあるが、筆者はこのような出会いを「自然発生的な出会い」と称することにする。それは、ネットやゲイバーなどを介した出会いが、ゲイである前提を保有しながら出会うことに対して、カミングアウトを行っていない状態の所属する社会で出会うため、より自然な出会いという意味を内包させたいがためである。例えば、学校など自身が所属する社会集団において、カミングアウト無くして他者が既知しているということは、ゲイの概念がセクシュアリティである以上容易ではない。一般的に、異性愛主体の社会であるために、男性なら女性が、女性なら男性が性的指向であることを皆明白な事実として受け取って生活している。そのため、この自然発生的な出会いは特に難しいことである。

続いて、この質問項目の中で、なぜゲイと会ってみようと思いたかを語った A さんと C さんの語りを以下に示す。

②インターネットを通じて出会ったゲイと現実社会で会おうと思ったキッカケ

きっかけは一なんかそういう自分の一、なんか、その一性に対するなんだろうな、うーん、男なの、男に興味があるのか女に興味があるのかみたいなのも、が一ちょうど悩んでいた、なんかなんなんだろう自分（ゲイなのかという疑心）みたいな思い出した時期で、でちょっとなんかそういう、なんだろう、一回会ってみたらわかるんじゃないかって。で会ってみるっていう。(A さん)

その自分ひとりで悩んでたけど。あっ意外に一、なんか人口的には一いるんだみたいなこんな近くにと思っで一。でそれでやり取りを始めて一、あーじゃあちょっと遊ぼうかっていう風になって会いました。(C さん)

二者の語りで、「悩み」が共有されていることが分かる。両者ともに、「自身が何者なのか」というアイデンティティにおける悩みが、ゲイ他者と出会う原動力になっていたことは間違いない。つまり、ゲイであると自明し、ゲイ他者と何らかの関係性を構築したいという動機以前のもっと根本的な、自身を知りたいがための出会いと言えるであろう。本研

究では、ゲイのアイデンティティやカミングアウトの問題を大きく取り上げるわけではないため、詳細に述べることは差し控えるが、ゲイの出会いの原動力が自身のセクシュアリティを知ることによって起因している可能性について言及はできるであろう。

4.3. ゲイ・アイデンティティ

本項では、ゲイ・アイデンティティについて Q3.1.及び Q3.2.の質問を統合して示し、若年ゲイの人生を辿る。

筆者は各調査協力者がゲイのアイデンティティを表出させるか否かを知るために質問を行った。語りからは、調査者協力者全員が自身のキーワードについてゲイを挙げたわけではないが、Aさん、Bさん、Dさんの三者がゲイまたは自身のセクシュアリティに関連する語りをした。

えっ大学一年生の一、えなんか一、うーん、ゲイの子で一みたいな感じ？うん。うーん
どうだろう、やさしいかな。(Aさん)

あなたは誰ですかー？自分が一番一、自分の中で一、ウェイトを占めてるのは一やっぱ
性別の問題？(Bさん)

まず一番思いつくのは暗い。根暗とか。あとは、割とゲイとか。最近はさっきの二つ目
に言った方(ゲイということ)が、海外行って帰ってきてからそれが大事。割と意識して
る。(Dさん)

7名の調査協力者は、いずれもツイッターでのゲイ・コミュニティへの参加に大きく関与しているにもかかわらず、ゲイのセクシュアリティについて語ったのはこの3名にとどまった。それについては、諸般の理由が考えられる。「俺はゲイだ！」といった一般社会で主張することもなく、純粹にゲイとしての居場所を見つけそれを謳歌している場合と、社会的なゲイへの差別意識をゲイ自身も感じ秘匿することが美德であると刷り込まれて人生を歩んできた場合である。後者については、Dさんが語るように、海外でのゲイの扱いと比較した上で、自身のゲイ意識が強まったことから、日本の一般社会におけるセクシュアリティの秘匿を理由としたゲイ自身のアイデンティティの弱さは否定できない。これに関連し、Cさんは以下のように語った。

そう、じゃないかもしれないけど一、やっぱり一、隠してる子もいっぱいいるだろうし
一、そこーをまず理解してもらわないと一そう隠してる子もいると思うから一まずそこ
を一、あの一理解してもらわないといけないけど一、でもそれを言って嫌われることも

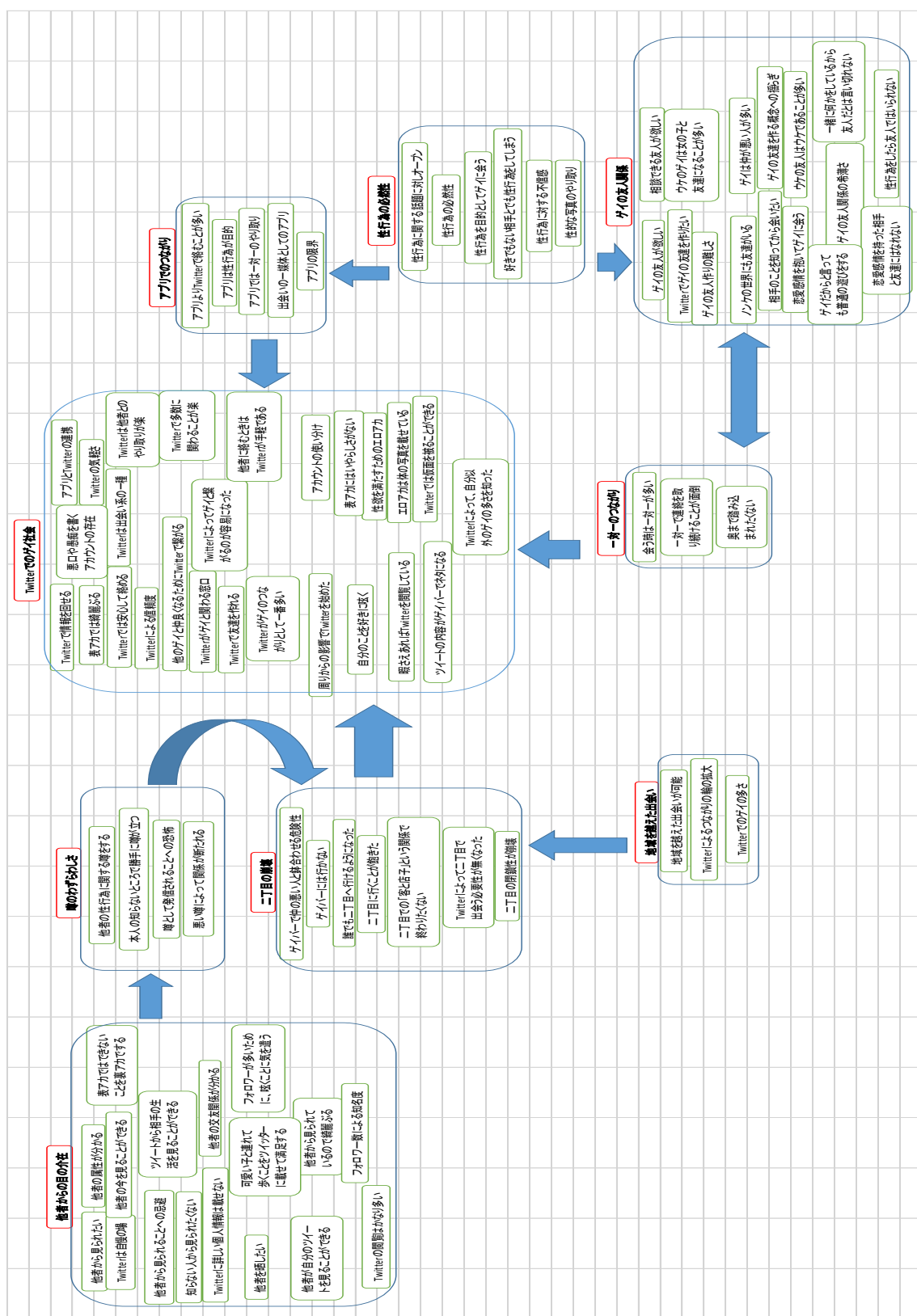
、絶対あるわけでしょ。その人がどうかじゃなくてそれを嫌ってる人も絶対にいると思うから。

筆者は、ゲイ・アイデンティティの表出が、今回の調査から少なかった理由として、ゲイが居場所を持ったことによる棲み分けの可能性も先んじて述べたが、C さんならびに D さんの海外の比較から、まだまだ日本においてゲイであることが容易に受容されるわけではないことも分かった。C さんの語りは、ゲイがストレートに恋をしてしまった場合に限定されたものであるが、カミングアウトによるストレートの友人との関係断絶の可能性とのせめぎあいが、ゲイにとって困難であるようだ。ゲイであることを秘匿しながら生きていくしかない今の日本においては、ゲイ自身のアイデンティティの弱さにも影響が出ると考えることができる。

さて、4 章で若年ゲイのコミュニケーションスタイルを概観してきたわけであるが、次の分析の項では KJ 法(川喜田,1967)を用いた分析によってさらに詳細に焦点化していく。

5. 分析

筆者は、4 章において **KJ** 法による分析によって焦点化された、四つのテーマについてそれぞれ取り上げて分析することにする。そのテーマとは、①若年ゲイのつながり（一対一のつながり、ゲイの友人関係、性行為の必然性、アプリでのつながり）、②若年ゲイ・コミュニティにおける体裁（他者の目の介在、噂のわずらわしさ）、③若年ゲイ・コミュニティの拡大（二丁目の崩壊、地域を越えた出会い）、④ツイッターでのゲイ・コミュニティ、に関する質問項目に対する回答を 7 人分まとめ、**KJ** 法において分析した。四つのテーマ間の関係について筆者は図 4 のように **KJ** 法 A 型を試みた。



以下、先述した四つのテーマの関係性について概観することを試みる。①～④の大きなテーマの中を、さらにいくつかのテーマに項目分けをしてそれぞれの関係を詳細に論じていく。

5.1. 若年ゲイのつながり

本項では、語りから表出された、一対一のつながり、ゲイの友人関係、性行為の必然性、アプリでのつながりという四つについてそれぞれを詳細に説明する。

①一対一のつながり

まず、この表題に関する質問として Q2.6.における語りを示す。質問の意図として、若年のゲイが 2 名以上の総体的なつながりか、一対一の特権的なつながりか、どちらをより強く望むまたは経験があるのかを知るためにこの質問を行った。

えっとー、うーん、もー一対一が多いかなと思う、うん。あっ、とーその一対一で遊んでてでその相手の友達が一近くにいるからー、なんか僕に会いたって言うてくれてー、でその、最初に、二人で遊んでたんだけどー、後からもう 1 人ちょっと話に来るみたいなのはありました。(A さん)

二人、からちゃちゃ一対一から一多いとー、1 2 人とか。一番多、くてたぶん 1 2 人、くらい。(B さん)

どういうこと？グループみたいなの？だいたい、3 人か 4 人。今までの、全部？一対一。そ、なんか友達っていう概念がなかったからー、自分の中では一だから一まほんとにそういう、性的な関係？(C さん)

俺は一対一が一番いいほんとは。(D さん)

一対一が多い。(E さん)

楽しく飲むときとかは何人でも良いけど、5、6 人とかだけど、破廉恥なことだったらやっぱり一対一だよ。一番多いのは) 4 人ぐらい。彼氏といるからね基本。そこに 2 人ぐらい追加して 4 人ぐらいでいることが多い。(F さん)

G さんを除く 6 名がこの質問について語った。この中で、F さんを除く 5 名が一対一でゲイと会うことが多いと語り、比較的特権的な二者のつながりを持つ機会が多いことが分

かる。鹿野(2011)では、ゲイの新たなつながりの構築方法として合コンの可能性について論じているものの、今回筆者が行なった調査によれば、そもそも若年ゲイは一对一のつながりを持ちたいということが分かる。特に注目すべきなのは、CさんとFさんの語りで示された性的な関係を結ぶためのつながりである。Cさんはもともとゲイに友人関係を求めていることは先述した。Fさんは、友人関係であれば何人で遊んでもかまわないが、性的な関係を結ぶ出会いの場合、一对一で会うことが多いと語る。その差異としては、他者からの目の介在が挙げられるのではないだろうか。性的な関係を望んだ場合一对一で会うと語ったFさんの語りを逆手にとれば、一对一であった場合、望む・望まないにかかわらず、性的な関係に陥ることが多いとも指摘できるのではないだろうか。刹那的なリアルを一对一でするとき、いかにゲイが性的関係を結びやすくまた、早期に関係の終末に結びつくかが分かるだろう。いずれにせよ、Fさんには恋人がおり、それが影響して複数名で友人関係を欲することが体裁上多いのかもしれない。こうした希薄なつながりに関しては、鹿野(2011)がその原因を事前に出会いの目的が分化されたインターネットによる出会い形態によって生じていると説明づけている。しかしながら、今回の調査によって希薄なつながりは、二丁目とインターネットという媒体の問題ではなく、若年ゲイが本質的に何を求めているかという質的な面が大きく影響していると考えられるのではないか。「ゲイの世界というのは、バアなどでよく逢う顔なじみであっても氏素性を明かさずに交流する期間（隠花植物時代）が長かったせいか、双方腹をわってホンネでぶつかりあう習慣というのがあまりできていない（竜,2009,p.67）」のように、つながりを形作る外的要因も含めて論議すべきである。

続いて、若年ゲイの友人関係及び友人観について論じる。

②若年ゲイの友人関係

この節では、若年ゲイの友人関係について語りから表出されたカテゴリーを基にして説明する。

鹿野(2011)では、若専ゲイバーの戦略として、店子が所有する個人ツイッター・アカウントで自店の情報をリツイートさせる集客法というものが挙げられた。さらに、公益財団法人エイズ予防財団(2010)の研究には、24歳以下のゲイにおけるツイッター利用率は50%を超えていることが示されている。本研究においては、筆者がツイッターを利用して調査協力者を募ったため、必然的に7名の調査協力者のツイッター利用率は100%である。全ての日本のゲイを網羅的に示すことは不可能であるものの、調査協力者の語りで、いかに現在のゲイ・シーンにおいてツイッターがつながりの多くを占めているかが明らかとなった。鹿野(2011)の研究で指摘された店子のツイッター利用のみならず、大多数のゲイ（特に若年層）がツイッターを利用することでゲイ他者とつながりを産出でき、またそれを維持するといった旨の語りを示した。このツイッターが可能にしたこととして、コミュニティの産出と、棲み分けの崩壊であると筆者は考える。竜(2009)においては、コミュニティとしての

ゲイバーを求めているゲイと、ゲイバーに赴かず生活しているゲイとの棲み分けについて述べられている。これは、調査協力者を見てみると明白である。7名の調査協力者のうち、Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさんは、ゲイ・タウンに通うことは無く、Fさん、Gさんについては頻繁にゲイ・タウンに通ったり、過去働いていたこともある。ゲイ・タウンに行く/行かないというゲイの中にも二項対立が見られたが、ツイッターはその制約に縛られない。ゲイ・タウンに行く人も行かない人もアカウントを開設し、その二者間でつながりを持つことも容易になったのである。つまり、掲示板やアプリのようなネット媒体における個人的なやり取りのみならず、ゲイ・コミュニティの一種をツイッターの中に見出すことが可能になったということが前者である。また、後者の棲み分けについては、以前では新宿二丁目などのゲイ・タウンに赴き、そのコミュニティに積極的に参入するゲイと、そうではないゲイとで大きな壁があったと思われる。しかしながら、ツイッターでのつながりは、その壁を取り払ったと言える。ゲイ・タウンに行く人と、行かない人という棲み分けが過去存在して、その二者間に密接なつながりは見られなかったものの、ゲイ・タウンに行く人も行かない人もツイッターを利用している点で、双方のアクセスが可能になったと言える。

③性行為の必然性

この節では、ゲイのつながりにおける性行為の必然性について説明する。今回の調査協力者の中で、Dさんを除く6名は自身がゲイ他者との関係で求めるものの中に性行為の介在を挙げた。また、Dさんは自身が求めるものとしては性行為を挙げなかったものの、ゲイのつながりに性行為の介在が往々にして存在することを示唆する語りを示したことから、性行為について筆者が論じることは不可避であると思われる。

それこそ自分の性欲の、解消に、うん必要としてるだろうし、性行為。三つだったらー、どうだろうなー、えーと、恋愛でー30%ぐらいで、でまあ性行為ぐらい性行為で40%ぐらい、残りの30%友達友人でみたいな。今現在は。(Aさん)

またまにやる相手？え身体の関係をもつ的な意味で。(Bさん)

昔は一、即行でした。高校生かな。自分もある程度そういう気持ちで、いつ会ったからーなんだ、ただ一緒に、寝たかった。(Cさん)

良いなと思った人とは、ちょっとイチャイチャしてみたい。(Eさん)

破廉恥な目的だったら、彼氏いるからこれシーッだからね？破廉恥なこと目的だったら月4、5。えっ嘘かも4ぐらい。月4かな。(Fさん)

セックスはまた別だし。セックスはセックスの関係とか、(Gさん)

上記の6名の内、FさんとGさんに関しては面接調査を依頼した時点で、恋人関係の相手がいることが事前にわかっている。Aさんは、恋愛関係、友人関係、性的関係の三つの中で性的関係の比重が一番多いと語った。次に、Cさんは現在と過去(高校時代)を比較し、過去において、会う＝性的関係を持つと定義づけた出会いを実行していたようである。さらに、FさんとGさんの恋人がいるにもかかわらず性的関係も同時進行で求めていることから、ゲイのつながりにおいて性行為の介在を声高に主張できると考えられる。特に、FさんとGさんの語りから言えることは、ある一定の安定した関係を結んだとしてもそれが不倫理な性行為を抑止することはできないということである。つまり、ゲイにとって関係性は性行為の介在を主な理由として一生不安定なものであるともいえるのではないであろうか。彼らの言う、「綺麗売り」という概念によって受け取られる、性行為＝悪しきものという認識が消え去らない限りは、関係性の一貫は不可能である。これを、同性婚の動きに当てはめてみるとその不倫理さはより鮮明に描き出されることになる。Cさん、Fさん、Gさんの語りを鑑みてゲイ諸氏にとって、パートナー関係を結んだとしても、その相手以外にも性的関係を希求し続ける可能性は高いかもしれない。さらに、ネットを介在した出会いは、調査協力者全員が未成年の段階でネットで出会っていることから、年々その対象が若年化し、かなり容易なものであることが分かる。異性愛社会における結婚に代替して考えてみると、およそゲイ同士の結婚が成立するとは考えにくいであろう。同性婚がもたらす関係についてよりゲイの関係性への価値観を詳らかに調査しなければ形骸化となってしまう。

竜(2009)においても述べられているように、ゲイとヘテロの違いは、「同性に惹かれるか否か」でしかなく、こうした性行為を求める関係性を構築しがちであることは、至極当然として考えられる。このように、性行為の介在がゲイのつながりに大きく関わっていることから、それによるつながりの弱体化も起こり得ると考えられる。

④アプリでのつながり

今回の調査協力者が「アプリ」として挙げたものとして、ナインモン스터ズがある。ナインモン스터ズは、「アジアをメインに世界各国で使用されるソーシャルゲイアプリの登場。メッセージやゲーム機能『ブリーディング』を使ってゲイ同士でのコミュニケーションを深めよう!²¹⁾」という説明文から分かるように、ゲイ同士の出会い系アプリである。先行研究において、金城(2010)で沖縄のゲイ掲示板のテキスト分析が行われているが、日本でのゲイ・アプリについて述べられているものは筆者の知る限り無い。本研究はあくまで若年ゲイがどのようにコミュニケーションを図っているかを調査しているため、ゲイ・ア

²¹⁾ <https://itunes.apple.com/jp/app/9monsters/id451345005?mt=8#> (2015年12月現在)

プリという媒体についてその機能や詳細を論じることは割愛する。

調査協力者によってゲイ専用アプリが主に性的なつながりを求めた媒体であることが語られた。

（アプリは）この人はそういう（性的な）目的だなんていうのがやっぱり特定されてきたじゃん。（Cさん）

アプリの方が肉体関係が多いかもしれない、気がする。（Dさん）

みんな多分そのため（性的接触）にやるのがやっぱりそういうアプリ系。

あっち（アプリ）って繁殖のためでしょ。行為のためだと。（Fさん）

上記のCさん、Dさん、Fさんがアプリの利用動機を主観的および客観的に示した3名である。これは、前項③性行為の必然性と強く結びつく媒体がアプリであると考えられる。つまり、アプリは性的なつながりを実践するための媒体でしかないと感じている若年ゲイも少なからず存在する。先行研究の中でも一致しているように、性的なつながりを求める場所として、ゲイ特有の文化システムともいえる発展場が挙げられる。筆者は、発展場の役割をアプリが代替するようになったのではないかと感じた。また、こうした性的なつながりを発展場の代わりに担うようになったアプリでの実際の認識ややり取りについて調査参加者は以下のように語る。

ツイッターで繋がった後、アプリでやり取りすることはほとんど無くなる。アプリより（ツイッター）の方が絡むかな。（Aさん）

（その友達と出会ったのは）アプリ。（Eさん）

（ゲイと出会う媒体は）アプリ。（Fさん）

アプリってガチな出会い系じゃん。（Gさん）

Aさんの語りは、ゲイ他者とツイッターでつながりを持った後にアプリでのやり取りに戻ることはないという不可逆性が語られた。これは他の三者が語ったように、アプリはあくまで、出会うことが目的であり後々の関係を構築することには適していないからである。ある新たなゲイ他者と出会うことでアプリの需要は完結してしまうわけである。

上記のように、若年ゲイにとってのアプリ利用について説明した。語りから表出されたゲイ専用アプリ像とは、長期的なつながりに特化したものではない、性的なつながりを産出

するための出会い系媒体であると認識されていることが分かる。

5.2. 若年ゲイ・コミュニティにおける体裁

本項では、調査協力者の語りから浮き彫りとなった、①他者の目の介在、②噂のわずらわしさ、という二点について語りを用いて論じていく。

①他者の目の介在

この項に係る質問項目として、主にツイッターに関連した語りを中心に論じる。他者の目の介在をさらにいくつかの項目に分ける。次にあげる、「他者から見られることへの忌避」と、「他者に見られたいという欲求」という相反する二つの意識について錯綜する語りを挙げていく。

他者から見られることへの忌避

この節では、調査協力者それぞれが、他者から見られることに対して何らかの忌避感を持ったり、見られていることを意識していることを語ったものを示す。

話してる内容も一ツイッターだと一、やっぱり他の鍵が付いてないと他の人も見てるんで一、自分、んーと一そんなにふん、んーなんていうのになになんだろ。個人的なこと？住んでる町の話だったり一、は話さないようにしてるし自分があんまり。特定されること？でも普通に遊んで一仲いが良ければ一、あ一何々大学なんだよね一みたいな？話は、普通に一しても良いかなっていう。だから一、なんていうの。ツイッターだと一他のいつ誰でも見られるから一、それを考えて一、ツイートするし一ある程度リプも？するし一、っていう感じ。(Bさん)

(表垢)ではできないことを一、やっぱその一、晒したりとか一するのに一やっぱそこでやってたらさ一その一、友達もいるし一いとことかもいるし一フォロワーに。それは見られたらマズいじゃん。(Cさん)

それは、最初付けてなかったけど1回知らない間に中学高校の同級生がこのアカウントを知らない間にフォローしてて、ビックリしてそれからずっと付けてる。あと前付き合ってた人も、俺知らなかったけどずっとチェックしてたみたいでそれも嫌だったから鍵かけたかな。

(Oのアカウントは)ツイートの内容がひどいから。誰にも見せらんない。あー。俺は本格的に、でも愚痴だけより、愚痴もあるけど、あつこの人良いなど

かそういうのもある。俺両方かな。(Oの方) 良いこともかなり言う。大きい方で言えないから。言うとなんかいろいろなっちゃうから。(Dさん)

まあメイン(のアカウント)で呟けないことを呟いてるから。愚痴とか。
(Eさん)

けど千何百人見てるところで愚痴吐くのはあんまりあれだから、そこでは綺麗ぶる。この子はすごい純粋で良い子なのっていうのを装う。裏マジきったないけど。もうこの人と繋がってたくないなって思ったとき、見てほしくないとき。だって自分がさ、フォロー解除したとしてもあっちは見れてるわけ。それを一回遮断するにはブロックするじゃんね。でも、もう嫌だ気持ち悪い、だからそれでストーカーとかも出てきちゃったから、ここら辺に住んでる何してるツイートを見てすぐLINE来る。今何してるんだって一みたいな。そういうウザい人を切ります、僕。(Fさん)

上記の5名によって、主にツイッターでの他者からの目の介在について語られた。まず、Bさんは、ツイッターにおいて個人を特定されうる情報を呟かないと語る。なお、Bさんは鍵アカウントではないため、ゲイに限らず全世界の誰からでもツイートを見られる点を先にあげておく。個人の特定に関するツイートへの配慮について語ったのはBさんのみであるが、Bさんの語ったフォロワーに対してのツイートの配慮については、他の調査協力者についても一定の語りを得ることができた。Cさん、Dさん、Eさんに関しては、表アカのフォロワーに見られてはいけないツイートを別途アカウント作成し対応していると語った。つまり、ある人が特定個人のツイッターアカウントを1つフォローしただけでは、相手を知るうえで十分とは言えないわけである。

②噂のわずらわしさ

続いて、ゲイという狭いコミュニティにおける、噂や風説の流布について語ったFさんと、Gさんの語りを示して説明する。

勝手に噂たてられたりとか。アイツは誰々を利用してるとか、アイツはアイツとやったとか。一時期なんかシャブ中とか。シャブ中だと思われてた。(Fさん)

例えば、Aってグループにいて、そのAっていうグループにいるBさんが結構いろんな人と仲が良くて、仲が良いっていうか、そのBさんはAっていうグループに所属してるって意識は無いんだけど勝手にそういう人たちの所有物になってて、Bさんは今度Zっていうグループに行ったら「なんであそこと遊んでんだろう？」とか「あの人

私たちはどういう関係なんだろう」っていう詮索をしたがる。誰と付き合ってるの、何してるのとかさ。あと嫌だったのは、セックスを酒の肴にして話す。(セックスの噂をするのに話す) 相手選ばないじゃん。

自己プロデュースできてないカスが多い、何に関しても。なんか綺麗売りしてんだったらさ、とことん綺麗に売れよって話でさ、なんか色んな奴とやってんのを結構噂とかいる中で綺麗売りすんのはバカじゃないのって思ったりとか、そういう意味での自己プロデュース。(G さん)

ゲイのつながりは、マイノリティであるがゆえに非常に密接であり、噂については非常に敏感であると言える。以前であれば、東京の新宿二丁目、名古屋の女子大小路、大阪の堂山などそれぞれの排他的で閉鎖的な地域に集っていたゲイも、ネットを通じて全国的なつながりを持つようになったのは他の語りからも受け取ることができた。そのネットが地域の壁を取り払ったことによって、こうした F さん、G さんの語る噂のわずらわしさはより顕著で広範囲のものになるであろう。上記の語りの中に示されているように、以前では新宿二丁目のような狭いコミュニティに参加するゲイの中には体裁を気にし、しがらみが存在していることは察することができる。それに加え、ツイッターでの振る舞いに関して語られている「他者から見られることへの忌避」の項も参考にすると、ゲイのつながりとはもはや個人的な問題ではなく、彼らは一種の体裁を保つことを強いられ生きていかなければならない。一般社会において、メディアなどで表出されるゲイ像は、単なる神話であり、彼らも一つの成立し得る社会において一般社会と同じようなしがらみの中生活しているわけである。その体裁の概念を G さんは以下のように明確に語った。

自己プロデュースできてないカスが多い、何に関しても。なんか綺麗売り²²してんだったらさ、とことん綺麗に売れよって話でさ、なんか色んな奴とやってんのを結構噂とかいる中で綺麗売りすんのはバカじゃないのって思ったりとか、そういう意味での自己プロデュース。

「綺麗売り」というのは、自身が綺麗であることを自身のキャラクターとして他者に示すことである。「綺麗売り」における「綺麗」とは、G さんの語りから分かるように、「綺麗＝性的なつながりを持っていない、貞操観念を持っている」といった定義づけがゲイの中でされている。そうした中で、G さんは少なからず、綺麗売りという自己プロデュースをゲイの中にしている人がいることを語る。体裁とはあくまで、他者から見た自身という意味である。よって、ゲイが個人として存在することよりも、体裁を気にするということの一つの社会の成立を認め、その中で自身の存在を安定的なものへと導いてきたい思い

²² 「綺麗売り」とは性に対して厳格である様として自身を他者に知らしめることであるとの語りから推察される。

も内包しているのではないか。

5.3. 若年ゲイ・コミュニティの拡大

本項では、若年ゲイ・コミュニティの拡大として、①二丁目の崩壊、②地域を越えた出会い、という二つのテーマを語りから抽出し説明する。

①二丁目の崩壊

新宿二丁目という世界有数のゲイ・タウンが縮小傾向にあるのは、先行研究においても指摘されている。本研究では、「二丁目」を新宿二丁目という単なる地区といったものに限定せず、あくまで概念的なものととらえる。つまり、ゲイバーなどが乱立し、ゲイが異性愛者からの視線を気にせず遊蕩できる場所という意味で「二丁目」という言葉を使用する。

この二丁目的なゲイ交流の場について、否定的とも捉えられる語りを示した G さんというゲイとしての活動期間が比較的長い人物である。以下にその語りを示す。

今みたいにツイッターで簡単にゲイの子たちと繋がれる時代ではなかったからさ、あと閉鎖的だったし。マツコもそんなにいなかったし、二丁目が。マツコが今みたいにフィーチャーされてなかったし、その時代っているのが、山崎トオルとかカバちゃんとかさ、おすぎとピーコだけだったからさ。そこまで市民権を得てなかったし。っていうんで、結構若い子が行ったら周りの大人がチャホヤしてくれてた。

ツイッターが発達して、そこで、さっきと矛盾するかもしれないけどさ、そこで出会う必要が無くなっているか、知り合う必要が無くなったっていうのと、鏡月に4000円はバカバカしいよね。今でも、まあずっとお金は出してもらえてるけど、経済観念が付くようになって、身についてから、まあバカバカしいよなとか、一通り遊んだから飽きたっていうのがあるかもしれない。飲み屋行ってわーってやってっていうのが終わった、飽きた。あと、田舎者が多くなった。ツイッターだよね。簡単にお店に行けるようになった。mixiでもさ、お店のアカウントっていうの無かったわけ。

普通連れてってもらってたのに自分で行くとか。そういう意味。(G さん)

G さんは、高校一年生から大学一年生の間にかけて足しげく新宿二丁目に通っていたと語った。その経験を踏まえ、どういった理由で二丁目に対しての不必要さを語ったのであろうか。二丁目の不必要さについて主に G さんが感じている要因として、ツイッターの誕生を挙げている。ゲイの出会いやつながりについては過去を辿ってその種類は数多く存在した。ゲイの交流の場であり、出会いの提供といった機能も包摂していたゲイ・タウンは

インターネットの登場によって来訪者の減少が大きな課題となっている。G さんによって語られたツイッターによる二丁目の代替という考え方は新たな現象であると言える。なぜなら、インターネットによるゲイ・コミュニティの変革は何もツイッターが最初ではないからである。ツイッター出現以前における、ゲイのインターネット利用は、インターネット掲示板、ゲイ専用サイト、GPS 機能付き出会い系アプリ、そしてツイッターという流れが大まかなものである。そうした流れを経験的に実践してきた G さんをして、このような語りを言わしめたのは興味深い。つまり、ツイッターはそれ以前の媒体と異なる何かを持っているということを示唆していると言える。こうした、今までと異なる性質を内包するであろうツイッターの登場により二丁目のようなゲイ・タウンの縮小傾向に拍車がかかった可能性は大いにある。

次に、同じく上記の語りの中に、二丁目の特徴ともいえるものが現れている。それは、連綿と受け継がれるある種、年功序列のシステムのようなものである。二丁目において G さんが示したのは、年上が年下に飲食を奢り、それを次の世代そのまた次の世代へと受け継ぐシステムを成立させていたことである。若年と中年以降のゲイというのは双方がなかなか需要と供給がマッチしないものの、こうした金銭の授受によってつながりを形成できる場所が二丁目のようなゲイバー街の利点であったともいえる。また、G さんの語りから年上におごられることが一種のステータス、自尊心への関与していることもうかがえるのではない。G さんの経験からの語りをまとめれば、年上のものが普段関わるることができない若年ゲイにアクセスするために金銭的な援助をする一方、若年ゲイは金銭的な援助を受ける自身を他の若年ゲイと差別化し、それによって自尊心の変化を得るという利点を双方とも持ち合わせていた。しかしながら、その連綿と受け継がれ、ゲイによるゲイだけのための生粋のゲイバーにおいて、G さんが現在するように、その伝統はとどまってしまった可能性が大いにある。この点については、竜(2009)も指摘している点であり、過去新宿二丁目において「若年者を遊ばせる文化」が存在していたが、その概念の崩壊によりゲイが「二丁目」に赴く必然性は失われたと考えられる。若年ゲイにとって、そうした概念自体知らずに気軽にゲイバーに出向き、若年ゲイ同士の一時的な遊び場として終わってしまうものと変化したことも二丁目の崩壊の一端を担っているのではないであろうか。新宿二丁目に代表されるゲイ・タウンの存在理由が出会い以外にも内包していることでインターネットと異なって存続できていたものの、ツイッターによる多様な意義によって淘汰されていく可能性は大いに考えられる。

②地域を越えた出会い

①二丁目の崩壊とは異なり、ゲイとしての出会い活動歴が浅く、ツイッターがゲイの中でメインとなった後から活動している調査協力者は、ゲイの交遊関係の広がりについて語った。また、語りは示されなかったものの、筆者が今回調査協力を依頼したツイッター利用者間においても、B さん（愛知県）と D さん（静岡県）、D さん（静岡県）と E さん（千

葉県)といった地域の垣根を越えたツイッターでの友人関係というものが存在する。

ツイッターの方が広がる。範囲がもっと広くなる。アプリだと GPS ですごい狭い。

さっきも言ったやつ、だから気軽にインタラクティブな感じで。あと範囲が広い。どんどん広がる。(D さん)

で、ほぼ紹介みたいな感じだったのにさ、それがツイッターでお店がツイッターのアカウント持つようになってからさ、あんまり来たこと無い若い子たちが増えたからさ。今までに常識じゃないけど、そういうことを知らないで遊んでるからそれがウザったくなった。田舎者が多くなった。だから田舎から出てきて、わーここ二丁目なんだから。(G さん)

上記の D さん、G さんの語りにおいて前者はポジティブ、後者はネガティブな視点から地域の拡大を感じている。D さんは GPS 機能付きゲイ専用出会い系アプリとツイッターを対比させ、その交友範囲の広がりについて利点としてツイッターを語っている。一方で、G さんは自身もツイッターを利用し、恩恵を享受しながらも、ツイッターによる田舎者＝東京外のゲイが二丁目へ流入することを忌避しているが、裏を返してみると二丁目のような居場所は拡大したと言えるであろう。元来、異性愛者主体の社会規範から外れた者として存在していたゲイは、狭小かつ不可侵な居場所を形成していたものの、もはやその意味がなくなったのではないか。ゲイの人々にとって二丁目のような居場所は差別からの忌避や、自身のセクシュアリティを唯一開示できる場所であり、それがその場所自体の原動力・存在意義になっていたはずである。しかしながら、それが二丁目である必然性はない。つまり、その受け皿の変化が二丁目からツイッターへ、といったものであると考えられる。

6. 結論

6.1. 研究設問への考察結果

本項において、面接調査から明らかとなった考察に基づき、冒頭にあげた以下の二つの研究設問に対する結論を述べる。

1. 日本の若年ゲイは何を求めてツイッターでのコミュニケーションを行っているのか。
2. 日本の若年ゲイは、現実社会とインターネットにどのように関わり、コミュニティを構築しているのか。

1. 日本の若年ゲイは何を求めてツイッター上でのコミュニケーションを行っているのか。

この研究設問において、まず念頭に置かなければならないのは、性行為の介在を基にしたつながりを若年ゲイが求めている点である。5. 分析の項においても示したが、「同性に惹かれる」というセクシュアリティのみを共通項にしてつながりを構築するゲイとは、性行為を必然とした関係構築に陥りやすく、またそれを実践するための一対一の二者間による限定的なつながりを求めることが多いのである。再度示すが、ゲイ同士でしかできない共通の事柄というのは性行為のみであり、それがセクシュアリティの解が無いとされるゆえんともいえる。語りにおいても示されたが、若年ゲイにおいては自身の判断基準にも性行為の介在をさせることもあり、セクシュアリティを基盤とした彼らのつながりにおいて、その乖離は起こり得ないと言える。もちろん、男女関係においても同等のことが当てはまる可能性も大いにあるが、筆者の調査で明らかになったように出会いのシステム、関係性の構築などの面から見てもゲイのつながりにおいては性行為を介在した関係を築きやすいのは紛れもない事実である。

また、若年ゲイにおけるつながりの種類を上記したが、つながりの質的な面を考えると、ゲイ特有の文化を見出すことができるのではないだろうか。相手の素性を知ることなく、つながりを構築し、温存・衰退させている彼らにとっては、親密な関係を強く望むことは無い。例えば、Bさんの語った、「深く自身のことを問い詰められることへの忌避」やDさんの語った「相手の苗字を知らないこと」という本来一般社会においてはなかなか成立し得ないつながりの構築が見られた。それでも彼らは、つながりを構築し続けているわけであるから、非常に緩やかなつながりを保持していることになる。それは、ツイッターにおいて謳歌されていることも語りから示した。新宿二丁目のようなゲイ・コミュニティがコミュニティとして成立した要素とされる厳格な排他性と伝統によって逆に衰退の一途を辿るであろうことは先行研究も示唆するように、本研究においても示された。若年ゲイにとって、伝統や排他性を重んじたゲイ・コミュニティはもはや必要なく、自由に活動

できる新たなゲイ・コミュニティとしてツイッターが台頭したと考えられるのだ。

上記のように、日本における若年ゲイの求めるつながりについて指示されたが、そのツイッターにおけるつながりと現実社会での若年ゲイ同士のつながりはどのように関係しているのであろうか。以下、研究設問 2.への応答として示していく。

2. 日本の若年ゲイは、現実社会とインターネットにどのように関わり、コミュニティを構築しているのか。

この研究設問への応答として、筆者が主に今回の調査で重きを置いたゲイのツイッター利用に関して示していく。若年ゲイのツイッター利用ならびに依存という関係は 4.1.1. において示した。つながりの可視化や、第三者からさえ会話を見られてしまうこと、一対一のやり取りではなく一対多数というコミュニケーションの場所などの性格を持ち合わせるツイッターにおいて、ゲイのツイッターとは、もはや生命線ともいえる。こういった、ゲイというセクシュアル・マイノリティが特異的に行ってきたコミュニケーションスタイルや形成してきた文化がいかにツイッターに内包されているかということを以下に示していく。筆者が KJ 法を用いて、インタビューを分析した結果を図 4 として本章の冒頭にあげた。図 4 において、①若年ゲイのつながり（一対一のつながり、ゲイの友人関係、性行為の必然性、アプリでのつながり）、②若年ゲイ・コミュニティにおける体裁（他者の目の介在、噂のわずらわしさ）、③若年ゲイ・コミュニティの拡大（二丁目の崩壊、地域を越えた出会い）という、三つのテーマがツイッターへ向かい、また相互的に関係しているのが分かる。5.1.から 5.3. に亘るテーマに関して、すべてがツイッターにおいて同じように実施可能であることが言える。以下、三つのテーマを再掲し、それがいかにツイッターに内包され得るか、また代替可能であるかを説明し、最後にツイッターと現実社会がどのように関係しているかを述べる。

まず、①若年ゲイのつながりにおいて、今回の調査協力者である若年ゲイたちがゲイ他者と一対一のつながりを多く求めていることが分かった。しかしながら、大勢の友人関係を構築することを全く希求していないかと言えば、答えは否であろう。彼らが求めているのは、ゆるやかなつながりであると言える。B さんの語った「奥まで踏み込まれたくない」という親密な関係を避ける語りや、D さんによる、「ツイッターでは個人あてに DM（ダイレクトメッセージ）を送れば良い」という語りは、ツイッターがまさに実現させているゆるやかなつながりを構築する上での利点であると言える。ゲイ・アカウントを作成することにより、ゲイ・コミュニティに参加することが可能となり、個人的なやり取りと違って一対多数のコミュニケーションを実現可能にしたツイッターにおいてやり取りの永続性は重要視されない。それが C さんの語りや、竜(2009)が指摘するゲイ世界における相手の素性を知ることが少ないことに対しての利点と言える。また、ツイッターは不特定多数のつながりを基本的な機能として受け入れられているが、D さんの語りが示すように、DM に

よって一対一のつながりを生起させることもできる。

若年ゲイの友人関係がツイッターの中において、二丁目に行くもの・行かないものという従来のゲイ・コミュニティの障壁を取り払い、広く関係構築が望めることは先述した。

続いて、性行為の必然性についてである。今回に限っては、若年ゲイ諸氏が性行為の介在によって関係を構築することが大いにあり得ることは理解できるであろう。それによって大いに利用され得る媒体がゲイ専用アプリであることも同時に示された。G さんによって、「ガチの出会い系」と称されたアプリは、ツイッターにおいても代替可能である。それは、p.36 図2：ゲイ・アカウントの分類において示されたアカウントの分化によって可能となったのである。ゲイにとって性的なつながりを求める従来の発展場は、その場所をアプリに移したことは先に示した。発展場とゲイバーには目的別のつながりが存在し、前者はアプリに代替されたが、さらにその代替をツイッターがアカウント使い分けによって担うようになったと考えられる。竜(2009)において、ゲイバーの存在は単なる実用性に特化したものでしかないという認識がなされていることから、様々なゲイのつながりを一挙に引き受けることができるのは、ツイッターの利点として大きい。

続いて、以下にゲイ・コミュニティに関する、②若年ゲイ・コミュニティにおける体裁（他者の目の介在、噂のわずらわしさ）、③若年ゲイ・コミュニティの拡大（二丁目の崩壊、地域を越えた出会い）の関係についてであるが、まず二丁目というコミュニティは非常に閉鎖的であり狭小である。「従来のゲイバアというのはコミュニティ色が強く、マスターを中心にがっちりチームが組まれている感じで、一見さん（初めて赴く来訪者）にはどうにも敷居が高い。（竜,2009,p.185）」からも分かるように、近寄りがたい場所であることが一種のステータス感を生み出していたことは、若年者が中年層から酒類をおごられるという語りで成立していたと本研究においても示した。しかしながら、この一見強固なつながりが災いしていることを語りは示している。仲間意識が強く、排他性を持った新宿二丁目というコミュニティが、②噂のわずらわしさをも強固にしたと言える。それは、G さんと F さんの新宿二丁目に足しげく通っている二人の語りにおいて、噂のわずらわしさが語られたため、排他的であるがゆえに狭小であり、一見親密な関係を構築できるかのように見える新宿二丁目というコミュニティはそれが逆に負の連鎖をも増大させやすいといえる。また、新宿二丁目の中核をなすゲイバーについては、その機能は出会いや社交の場であると考えられるが、G さんによる、「ツイッターのおかげによってゲイバーで出会う必要がなくなった」という語りも援用した上で、これもまた、発展場がツイッターへとその場を移したのと同様に、ゲイバーの機能もツイッターに内包されているようである。ゲイバーの商業的な実践に関しては、石田(2004)が詳しいものの、若年ゲイのゲイバーを希求する動機に関して詳細に述べている研究は筆者の知る限りでは、無い。つまり、「どうして新宿二丁目のゲイバーに若年ゲイが赴くのか」ということは述べられていないのである（むしろ、数少ないゲイバーに関する先行研究においても、若年ゲイによるゲイバー離れが取り沙汰されていることにとどまっている）。これまで成されてきた新宿二丁目というゲイバーを中核に

据えたコミュニティについては、帰結としてゲイバーを信奉するものが多いが、今回の面接調査からも分かるように、若年ゲイが本質的に欲する関係から起因する新宿二丁目という名ばかりであり、何らかの期待を持ってコミュニティと呼ばれてきた場所はもはや不要なのである。実際に、ゲイバーの利点を垣間見ることのできない現在の新宿二丁目は、セクシュアリティのみを共通項にしていると感じられ、ツイッターのゲイ・コミュニティにおいてセクシュアリティを共通項にできるわけであるから、その方が緩やかに、金銭的にも無駄のないものへと代替するのは必然である。

しかしながら、現実社会がインターネットにすっかり代替したとは言えない点が唯一存在する。それは、若年ゲイが求めているのはインターネットの中で完結するものではないということである。つまり、いくらインターネットにおいて自身の充足が満ち、ゲイ他者の存在を垣間見ることができても彼らには不十分なのである。インターネットを通じた出会い、そしてツイッターにおけるゲイ・コミュニティの存在は、そうしたインターネットの中に帰結を見出すものではなく、あくまで現実社会で出会うための手段でしかないのである。例えば、インターネットという場でのみ、自身の自尊心を高められるという動機でインターネットを活用している人もいるだろう。趣味や特定の知識共有のために集うネット・コミュニティとは、セクシュアリティというオンもオフもないアイデンティティとは異なる。つまり、インターネット上でのみアイデンティティを持つのではなく、4.3.に示したように、ゲイというのは現実社会にしろ、インターネット上にしろ、アイデンティティは強く意識されるし、自身で変えることもできない。三浦(2009)が示すような、普段の生活において自尊心の充足ができず、匿名性を利用したインターネットにおいて社会的属性関係なしに自身のアイデンティティを構築できる場としてインターネットを謳歌している人々と若年ゲイは大きく異なる。あくまで現実社会ありきであり、他の出会い系サイトやコミュニティと異なり、個と個の関係のみに収束しているわけでもない。以前のように出会い系アプリのみを通じて出会う場合、ゲイバーなどと比較して個人的なやり取りのみ実行しているように受け取られていたが、ツイッターにおいてはそうはいかない。つまり、情報の拡散や他者から見られていることで自身の振る舞いが拘束され、本研究の調査協力者から得られた語りにも表れたように、まずツイッターで自分を他者に良く思ってもらわなければゲイのつながりの最終的な目標であるリアルすることへの妨げになってしまう。いかに自身を良く見せるかといった行為は、自身の自尊心の充足というよりは、ツイッターの中のゲイ・コミュニティで自身を不特定または特定多数のゲイ他者に見せ、実際にあらたなリアルの可能性へとつなげていくという点で、相互補完的な関係であると言える。

6.2. 本研究の専門領域への貢献

先行研究においては、現代のゲイにとってインターネットは出会いやコミュニティとして必須であることが多く示されていた。しかしながら、その実態について説明されているものは数少なく、若年ゲイの主流であるツイッターに関するものは皆無であったため、その点において貢献できたと思われる。

さらに、ゲイという不可視なマイノリティに対しアクセスが難しいと考えられる中で、他の先行研究において見られない数の若年ゲイから幅広く面接調査を実施できたことは大きな貢献と言えるであろう。詳細には、まず、「居住地」に関して、先行研究群において、東京や大阪という大都市を中心としたものが多く、広く若年ゲイをとらえるには不十分だと考えたことと、現代のゲイにおいてつながりが拡大している可能性を鑑み、愛知、静岡、東京、千葉の4都市の若年ゲイに調査協力を依頼した。続いて、「年齢」に関しては、筆者が本研究において焦点化している若年ゲイの中で、18 から 22 歳というゲイの中でもアクセスしやすい年齢層で調査を試みた。次に、「恋人の有無」であるが、森山(2009)においてのつながりの分化として、「特権的・総体的」というものが挙げられているため、その二種類のつながりにおいて差異が見られる可能性を感じ、示した。そして、「フォロワー数・フォロー数」は、本研究の主題であるツイッターに大いに関連しているため、調査協力者がツイッター上でどのような立ち位置であるかを示唆するために記載している。

さらに、ゲイ・コミュニティに関する先行研究においては、新宿二丁目のようなコミュニティを肯定する者が多くみられたが、本研究はツイッターにおけるゲイ・コミュニティの可能性を考察できたことも、貢献と言えるのではないだろうか。

6.3. 本研究の限界と課題

本研究は、若年ゲイのつながりとそのゲイ・コミュニティについて主にツイッターに重きを置いて論じたわけであるが、本研究の限界として以下のことが挙げられる。

まず、調査協力者の語りがゲイ全体に当てはめられることはできないという点である。本研究の語りにおいても示されたように、ゲイの中には「若年至上主義」という逆年功序列的な価値判断が存在するために、あえて筆者はそのメインストリームである若年ゲイを調査の対象とした。しかしながら、現在の中年層のゲイについても同じように若年期が存在し、ゲイとしての人生を送っていたことは想像でき、どのような若年期を過ごし今の中年期を迎えているかということに焦点を当てれば、時代背景の違いはあるにしろ、現代の若年ゲイがこれからどうつながりを構築し、ゲイ・コミュニティを存立させていくべきかという解法に一助を与えてくれるかもしれない。あくまで、本研究においては、若年ゲイを対象にしているために、その結果を持ってゲイへと一般化することは容易ではないという限界を持ち、今後の課題として一つ上の世代といったように階層的にゲイに調査すべき

であると考えられる。加えて、世間のセクシュアリティに関する社会的な情勢は昨今非常に隆盛を見せているため、ゲイのつながりがより充実し、安定したものへと変容するために研究を続けるべきと考える。

謝辞

本研究を執筆するにあたりご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げたい。

まず初めに、今回筆者の面接調査にご協力いただいた 7 名の調査協力者に。筆者はあくまで外部の人間であり、セクシュアリティという日本においてまだまだ秘匿せざるを得ない立場について詳らかにお答えいただき、筆者に新たな知見を授けていただいたことに、心から感謝する。

そして、指導教員の任を快く引き受けて頂き、今日まで様々な面で多大なご助言をくださった末田先生に。セクシュアリティという学術的にもまだまだ日本においてタブー視される内容について執筆する筆者にも真摯に向き合ってください、見識が浅い筆者にとって新たな方向性を与えてくださったことは論文に大きな寄与を頂いた。先生の御指導によって修士論文を執筆できたこと、心から感謝申し上げたい。

また、副査として筆者の修士論文に関して丁寧かつ的確なご指導をして頂いた、國分先生ならびに猿橋先生にも感謝を申し上げたい。また、大学院における授業などを通じて筆者に学際的知見を与えてくださった先生方、修士論文の事務的な面で大変お世話になった教務課の大学院ご担当の方々にも感謝したい。

最後に、筆者と共に大学院の研究にいそしんでいた国際政治学研究科の方々、心の休まる時間を過ごしてくれた国際コミュニケーション専攻の方々へも、感謝の弁を述べたい。

引用文献

(日本語文献)

- 石田仁(2004).「ジェンダーとセクシュアリティの真空圏」.『紀要社会学科』.14. 81-98
- 石丸径一郎(2004).「レズビアン, ゲイ, バイ・セクシュアルについて」.『心身医』.44. 8. 590-594
- 磯川全次(2003).『男色の民俗学(歴史民俗学資料叢書・第二期)』.批評社
- 川喜田二郎(1967).『発想法』.中央公論社
- 桐原奈津, 坂西友秀(2003).「セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミングアウトへの反応」.『埼玉大学紀要』.教育学部(教育科学 I). 52(I). 55-80
- 鹿野由行(2013).「運命の物語」と計算された親密さ--ゲイの出会いのツールの変化と合コンの流行」.『大阪大学日本学報』.30. 47-66
- 鹿野由行(2015).「ゲイバーは不要なのか? : 「若専」ゲイバーにおける新たな戦略」.『日本学報』.34. 81-96
- 新ヶ江章友(2013).『日本の「ゲイ」とエイズ コミュニティ・国家・アイデンティティ』.青弓社
- 末田清子, 抱井尚子, 田崎勝也, 猿橋順子(2012).『コミュニケーション研究法』.株式会社ナカニシヤ出版
- 砂川秀樹(2003).「ゲイ・コミュニティ」の形成」.『SEXUALITY』.N009. 138-145
- セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク(2006).『セクシュアルマイノリティ【第2版】』.明石出版
- 花咲一男(2006).『江戸のかげま茶屋』.三樹書房
- 福田茉莉, サトウタツヤ(2008).「あるゲイにおける自らの存在意義をめぐる語り : 「ゲイ」と「ノンケ」の境界を行き来する当事者のあり方」.日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (17), 200-201
- 伏見憲明(2004).『ゲイという経験 増補版』.ポット出版
- 三浦麻子(2008).「ネット・コミュニティでの自己表現と他者との交流」.電子情報通信学会誌, Vol. 91, No.2.
- 森山至貴(2010).『「ゲイ・コミュニティ」の社会学』.勁草書房
- 竜超(2009).『消える「新宿二丁目」』.彩流社
- 和田実(1996).「青年の同性愛に対する態度 : 性および性役割同一性による差異」.『社会心理学研究』.12. 1. 9-19

(英語論文)

- Baams, L., Jonas, K. J., Utz, S. (2011). Internet use and online social support among same sex attracted individuals of different ages. *Computers in Human Behavior*, 27, 5, 1820-1827
- Hanckel, Benjamin, Morris, Alan. (2014). Finding community and contesting heteronormativity: queer young people's engagement in an Australian online community. *Journal of Youth Studies*, 17, 7, 872-886
- K.Y.A. McKenna and J. Bargh. (1998). "Coming out in the age of the internet: Identity 'demarginalization' through virtual group participation," *J. Personality and Social Psychology*, Vol. 75, No.3, pp.681-694.
- Pingel, Emily S., Bauermeister, Jose A., Johns, Michelle M.(2013). "A Safe Way to Explore": Reframing Risk on the Internet Amidst Young Gay Men's Search for Identity. *Journal of Adolescent Research*, 28, 4, 453-478
- Pedrana, Alisa, Hellard, Margaret, Gold, Judy. (2013). Queer as F(star star)k: Reaching and Engaging Gay Men in Sexual Health Promotion through Social Networking Sites. *Journal of Medical Internet Research*, 15, 2, e25
- Race. (2015). Speculative pragmatism and intimate arrangements: online hook-up devices in gay life. *Culture Health & Sexuality*, 17, 4, 496-511
- Szulc, Lukasz, Dhoest, Alexander. (2013). The internet and sexual identity formation: Comparing Internet use before and after coming out. *Communications-European Journal of Communication Research*, 38, 4, 347-365
- Taylor, Yvette, Falconer, Emily, Snowden, Ria. (2014). Queer youth, Facebook and faith: Facebook methodologies and online identities. *New Media & Society*, 16, 7, 1138-1153

参考文献

- 折田明子(2012).「ソーシャルメディアと匿名性」.人口知能学会誌, 27 巻 1 号.
- 北野充(2010).『ビジネスパーソンのためのツイッター時代の個人「発信」力』. 株式会社
ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 斉木涼(2009).『新宿二丁目ウォーズ 男の中の男のサバイバル術』. 大和書房
- 末田清子(2012).『多面的アイデンティティの調整とフェイス（面子）』. 株式会社ナカニシ
ヤ出版
- 関修(2009).『挑発するセクシュアリティ―法・社会・思想へのアプローチ』. 新泉社
- 津田大介(2009).『ツイッター社会論』. 株式会社洋泉社
- 三浦麻子, 森尾博昭, 川浦康至(2009).『インターネット心理学のフロンティア』. 誠信書房
- 元木一朗(2011).『ツイッター後のネット社会』. 株式会社アゴラブックス
- 森山至貴(2010).「呼称が立ち上げる〈わたしたち〉-ゲイ・バイ・セクシュアル男性へのイ
ンタビューから-」『社会学評論』. 62. (1). 103-122
- 好井裕明(2006).『「あたりまえ」を疑う社会学 質的調査のセンス』. 光文社新書
- Simon Le Vay (2002).『クィア・サイエンス 同性愛をめぐる科学言説の変遷』..勁草書房

付録 1：面接調査同意書

面接調査の同意書

1. 研究テーマ：日本における若年ゲイの関係性についてのインタビュー調査
2. 調査者名：大谷勇介
3. 調査者の所属機関：青山学院大学 国際政治経済学研究科 国際コミュニケーション専攻
4. 調査者の連絡先：〒181-0002 東京都三鷹市牟礼二丁目 11-27 コスモス三鷹台 101
携帯電話：090-6765-9413 e-mail：kazu_beatles331@yahoo.co.jp

本日は、面接を受けることを承諾いただき、誠にありがとうございます。

以下の確認事項をお読みください。

(1) 面接

- ①面接への参加は自由であり、面接の中断および中止はいつでも行えます。
- ②回答を拒否することができます。
- ③音声録音を停止することができます。
- ④ご希望であれば、面接記録を閲覧できます。

(2) プライバシー

- ①面接に係るデータは厳重に保管します。
- ②面接内容については、調査者と指導教官のみ知り得ます。
- ③面接に係るデータは調査者が責任をもって破棄・消去します。

(3) 面接手順と結果の公表

本調査の手順；

- ①面接者が口頭で質問しますので、ご自由にご回答ください。
- ②面接内容は、IC レコーダーを使用して録音します。
- ③面接は1時間程度を予定しております。

面接のデータについては、論文に記載の上公表する予定です。その際、面接にご協力いただく方の個人情報厳重に取り扱われ、プライバシーの侵害が起こらないよう細心の注意を払います。

上記の内容をご確認の上、同意していただける場合は、次にご署名と日付の記入をお願いいたします。

日付 _____ 年 _____ 月 _____ 日

調査者署名 _____ 署名 _____